

令和4年度
文部科学省委託調査

「幼児教育の好事例の 収集・蓄積に関する調査研究」

「幼児教育のデータ蓄積・活用に向けた調査研究」

調査報告書

令和5年3月

株式会社 リベルタス・コンサルティング

本報告書は、文部科学省の「幼児教育のデータ蓄積・活用に向けた調査研究事業」の委託費による委託業務として、株式会社リベルタス・コンサルティングが実施した令和4年度幼児教育のデータ蓄積・活用に向けた調査研究事業の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承諾が必要です。

目次

はじめに	1
第 1 章 調査概要	4
1-1 調査目的	4
1-2 調査概要	5
第 2 章 本調査を通じた事例	11
2-1 研修等における活用を目指して整理した事例	11
2-2 その他提出いただいた事例	37
第 3 章 まとめ	73
第 4 章 参考資料	74

はじめに

河合 優子／聖徳大学教育学部 教授／当調査研究 有識者委員

幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることが教育基本法において明示され、その認識は広がりつつある。一方で、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園（以下「幼児教育施設」とする。）における質の高い幼児教育とは何かに関して、いわゆる早期教育や小学校教育の前倒しと誤解されがちであるなど、社会的な認識が共有されているとは言い難いことが指摘されている。

平成29年に公示された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においては、教育に関わる側面のねらいや内容に関して更なる整合性が図られるとともに、小学校教育との円滑な接続を図るよう努めることが明記されている。

幼児教育施設における幼児教育は、幼児期の特性を踏まえ「環境を通して行う」ことを基本としており、遊びを通じた総合的な指導を行うこととされている。幼児は自発的な活動としての遊びの中で、興味や関心を広げ試行錯誤し考えることや人との関わりを深めることなどを重ね、幼児期に必要な資質・能力を身に付けていく。こうした幼児の学びを支えるのは、幼児理解に基づいて意図的、計画的に行われる環境の構成や、幼児の主体性とのバランスを踏まえた教職員の働きかけなどであり、高い専門性を要するものである。幼児教育の質向上にあたり、各幼児教育施設における教職員の資質向上に向けた園内研修等の充実が喫緊の課題である。

一方、幼稚園教諭をはじめとした幼児教育施設の教職員については、私立の施設が多いことなどを背景として、小中学校と比較して若手教職員が多く、平均勤務年数も短いなど、経験豊富な中堅教職員から若手教職員へ専門性が継承されにくい現状があると指摘されている。若手教職員がよりよい実践に向けて、具体的な場面を通して自身の日々の実践と結び付けながら学ぶ機会が必要である。

こうした状況を踏まえ、本調査研究は以下の二つのことを目的としている。

1. 幼児教育の理解促進を図る

幼児教育施設で他校種の教員等が保育を参観する機会が増えてきている。その際、「園の先生方が笑顔で見守っているのが印象に残った」「幼児がやりたいことに積極的に取り組み、自分たちで進めている姿に驚いた」などの感想を受け取ることが多いといわれる。「笑顔で見守る」「幼児が積極的に取り組む」姿の背景には、一人一人の幼児の興味や関心、発達の状況、教育課程を踏まえた幼児にとってそのときに必要な経験の理解、その遊びの展開への見通しや必要な教材等の想定などの幼児理解がある。教職員はこれらの教育的意味を物的、人的等の環境に含ませるとともに、幼児の心が動きやってみたくなるような状況をつくる

など環境の構成を丁寧に行う。このことにより、幼児の自発的な活動としての遊びが生まれ、展開され、幼児はその過程の中で総合的に学んでいく。そのため、教職員の指導は間接的であることが多く、一見しただけでは分かりにくい側面がある。また、こうした取組は「環境を通して行う」という幼児教育の基本を大切にしながら日常的な実践の中にある。

そのため、本調査研究では全国の幼稚園等の日常的な実践における事例を収集し、幼児の学びや教職員の指導を言語化、可視化することにより、「見えにくい」と言われる幼児教育の理解促進を図ることを目指している。なお、事例収集の際には本調査研究の目的に対応して記述いただけるよう、フォーマットにコメントを付して依頼している（P.75 参照）。

今年度は「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」を参考に、「幼児期の活動に見られる遊びのプロセス」の視点から事例を収集し、遊びのプロセスを図式化するなど整理して示している。事例によって整理の仕方に若干の違いがあるが、今年度は試行としてまとめ方を固定化せず、より分かりやすい方法を模索していくこととしている。

2. 若手教職員が参考にできる資料を作成する

幼児教育は主たる教材としての教科書を用いず、幼児理解に基づいた教育課程の編成、指導計画の作成、実践及び評価といったサイクルの中で行われる。指導計画に基づいた実践であっても幼児の様子に応じて柔軟に指導が展開されていく。そのため、若手教職員にとって、保育の営みは体験しながら理論と結び付けて捉え、徐々に体得していく側面が強い。本調査研究では、若手教職員にとって実践とその背景にある指導の意図や理論が分かりやすく、次の実践に活用できる資料の作成を目指している。

（1）事例で伝えたいことの焦点化

幼児は遊びの中で総合的に学ぶことから、一般的にひとつの実践事例の中に様々な学びの様態が網羅的に示されていることが多い。幼児教育として重要な点である一方で、話し合いの視点が広がりやすく、考察や協議が参加する教職員の経験に依拠しがちであることも考えられる。若手教職員にとっては、事例の読み取りにくさや協議を通してわかった気はするが自分の実践には生かしくいといったことも想定される。そのため、本調査研究においては、事例の中で若手教職員に伝えたいことを焦点化して端的に示すことを試行している。このことにより、若手教職員自身が自分のペースで学ぶことができるようにするとともに、園内研修等において活用する際にテーマから逸れずに協議を行い、先輩教職員から指導のポイントを具体的に伝えたり、若手教職員が自身の実践と結び付けて理解したりしやすくなることを目指している。

（2）若手教職員の困っていることへの対応

上記の焦点化にあたっては、若手教職員の困っていることに対応することを考慮している。若手教職員の状況として、「他の教職員の保育を参考にしたい気持ちがあっても目の前

の幼児の姿や日々の園生活の展開に追われ、そのゆとりがない」「先輩の保育はすごいと思うが、自分は何が分からないのか、先輩と何が違うのかについて、意識化したり具体化したりにして考えることが難しい」「手遊びや製作など具体的な活動については、相談したりインターネットで検索したりして次の実践に生かすことができるが、幼児の主体性と保育者の意図を込めて環境を構成し援助する、というのは分かりにくい」などが挙げられる。

そこで、若手教職員が困っていきそうなこと、気付いてほしいこと、解決のためのヒントになりそうなことを視点として事例をまとめ、その視点を事例のサブタイトルに示している。

(3) 園内研修における本事例集の活用

幼児の体験を豊かにするためには、幼児理解に基づいた環境の構成が重要である。幼児の主体性を引き出す教育だからこそ、保育者の意図は目に見えにくく、先輩教職員が行っている環境の構成の意図を若手教職員が気付くことは容易ではない。先輩教職員も経験に基づいて環境の構成をしており、若手教職員に分かりやすく言語化することが難しい場合もある。本事例集を園内研修の導入として活用することで解決に向けて「焦点化」した話し合いの参考になれば幸いである。また、園内研修にとどまらず、地域の方や他校種の教職員に対して幼児教育を解説する際にも活用できるものとする。

日常的な実践における事例を若手教職員にとって分かりやすく整理することは、「見えにくい」といわれる幼児教育における指導を可視化するとともに、全ての教職員が自身の実践で無意識に行っていることやそこに含まれている価値を見出し捉え直すことにつながると考えられる。園内研修で各教職員が自分の実践を自分の言葉で語り合うことは、経験知を言語化して園内で共有、継承し、幼児の体験を豊かにすることとなり、幼児期にふさわしい子どもの学びを保証していくことに資するであろう。さらに、自園の教育を他者に分かりやすく説明することにもつながり、幼児教育の正しい認識を社会と共有する一歩になることが期待される。

第1章 調査概要

1-1 調査目的

幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、この時期に質の高い幼児教育が提供され、その成果が小学校以降の教育につながっていくことが重要である。そのためには、幼児の多様性に配慮し、幼児の学びや発達を促すような保育の充実を図ることが求められていることから、幼児教育施設における幼児教育の好事例（データ）等の収集・蓄積、幼児教育関係者における好事例（データ）の活用の在り方に関する調査研究を行う。

幼稚園における教育課程の基準を示した「幼稚園教育要領」は、2017年3月に告示され、2018年4月から施行された。また、保育所や幼保連携型認定こども園についても、教育内容の一層の整合化が図られ、「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」についても同日で告示及び施行がされている。

今回の改訂・改定においては、育みたい資質・能力が明確化されるとともに、資質・能力が、3要領・指針（幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領）に示されている5領域におけるねらい及び内容に基づいて展開される活動全体を通して育まれていった時、幼児期の終わり頃には具体的にどのような姿として現れるかを、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として示されている。

これらの背景を踏まえ、本調査においては、幼児教育の充実に資する保育の工夫について、幼稚園等や幼児教育関係団体を対象として幅広い事例を収集し、保育の経験の少ない教職員、小学校教員等にわかりやすく伝えるためにその成果を事例集としてまとめることを目的とする。

1-2 調査概要

1-2-1 有識者会議の設置

有識者等による委員会を開催し、調査の設計・分析に関するご意見を頂いた。委員は下記の通り（50音順、敬称略）。

(1) 有識者委員名簿

岡上 直子	全国幼児教育研究協会 顧問
河合 優子	聖徳大学教育学部 児童学科 教授
高橋 慶子	目黒区立みどりがおかこども園 園長
波岡 千穂	学校法人伸和学園堀川幼稚園 副園長

(2) 有識者会議概要

第一回 日時	令和4年11月15日（火）10時～12時
開催場所	オンライン（Zoom）
議題	（1）調査趣旨・内容について （2）幼児教育の好事例の収集のための事例記載フォーマットについて （3）幼児教育の好事例収集対象について （4）その他

第二回 日時	令和5年2月13日（月）16時
開催場所	オンライン（Zoom）
議題	（1）事例について （2）報告書について （3）その他

第三回 日時	令和5年3月20日（月）10時
開催場所	オンライン（Zoom）
議題	（1）報告書について （2）その他

1-2-2 好事例の収集の概要

好事例の収集の概要は、下記の通り。

(1) 事例収集のための事例記載フォーム作成

事例収集にあたり、各園の担当者を取組を記載していただくための事例記載フォームを作成した。今年度の調査においては、「幼児の活動に見られる遊びのプロセス」に視点をおいた事例を収集する。事例記載フォームは、下記の項目ごとに各園で取組について記載していただいた。

事例記載フォームの項目及びイメージは下記のとおり。

■事例記載フォーム項目■

項目	記載内容
取組事例の名称	事例で若手保育者に伝えたいことをサブタイトルに記載。
対象児の学年と時期	〇〇歳児、〇月
事例の概要	2～3行程度
具体的な遊びの様子	遊びの様子がわかる写真を添付し、その写真について説明を記載。 ※写真のデータは別途提出 ※園児名は「A 児」「B 児」と記載。誰の動き・言葉なのか、関係性がわかるように記載。
環境の構成	人やものとの関わりについて記載。 【説明】「環境の構成」は、保育者が願いを込めて準備したこと、事例の中で幼児たちの反応が面白かった素材・遊具などの環境や、保育者の援助等、提出する事例が好事例と考えた理由につながるものが読み取る材料となるよう記載する。その中に、保育者が、なぜ、〇〇〇の援助をしたのか、その背景（保育者の思いや願い等）に関することが記載されていると、読み手が分かりやすいと思います。最終的な紙面は、3～4行程度を想定していますが、全体的な調整・編集をする際に要点が分かるように書いていただきたいので、6～7行になっても構いません。
保育者の意図	【説明】保育者が願いを込めて準備したこと、事例の中で幼児たちの反応が面白かった素材・遊具などの環境や、保育者の援助等、事例から読み取れる、幼児教育らしい特徴について、素人にも分かるように丁寧に記載する。 ※保育者が、なぜ、〇〇〇の援助をしたのか、その背景（保育者の思いや願い等）に関することが記載されていると、読み手が分かりやすいと思います。 最終的な紙面は、4～5行程度を想定していますが、全体的な調整・編集をする際に要点が分かるように書いていただきたいので、6～7行になっても構いません。
若手保育者の気付き	※この欄は、保育者自身に自分の日々の保育に参考にできそう・取り入れてみたいと思っきっかけになることを目指しています。若手保育者が事例を読んで気付いたことや自分の保育を振り返ってハッとしたことなどを、率直な表現で書いてください。 特に、別紙の記載例のような自分の保育を振り返ってハッとしたことなどが入ると分かりやすいと思いますので、ご記入の際の参考にしてください。
流れ図	※PowerPoint 等で作成し、データをご提出お願いいたします。

項目	記載内容
<p>前頁の写真と【遊びの様子】から読み取れる幼児の内面の変化を、関係性が分かるように流れ図にご記載ください。</p>	<p>※前項の〈保育者の意図と若手保育者の気付き〉の記載内容と関連付けて作成すると、焦点化して描きやすいと思います。</p> <p>※流れ図の作成が難しい場合は、いただいた情報をもとに弊社で作成いたします。</p> <p>【説明】●保育者の動きも関連することが多いので、事例に応じてご記入ください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●幼児の内面の変化を資質・能力と関連付けて考え（分析）、色文字で目立つように表記してください。 ●分析の視点は、資質・能力の解説図の三つの楕円の中に例示されている言葉を参考にして考え、ご記載ください。
<p>ワンポイントレッスン 前頁の保育者の意図と若手保育者の気付きを受けて、若手保育者が次のステップに進むために気付いてほしいことをご記載ください。</p>	<p>※若手保育者が、自分の保育を振り返ることができるように、Q & Aの形で完結に視点を示して記載してください。</p>
<p>小学校教育の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ</p>	<p>小学校教員に伝えたいことがあれば記載</p>

各園に取組事例の記載を依頼した「事例記載フォーム」は p75～p80 を参照のこと。

(2) 事例記載見本

事例収集にあたり、事例記載フォームとともに以下の事例記載見本¹を配布し、プレ調査ならび本調査の記載項目・内容の参考として参照いただいた。

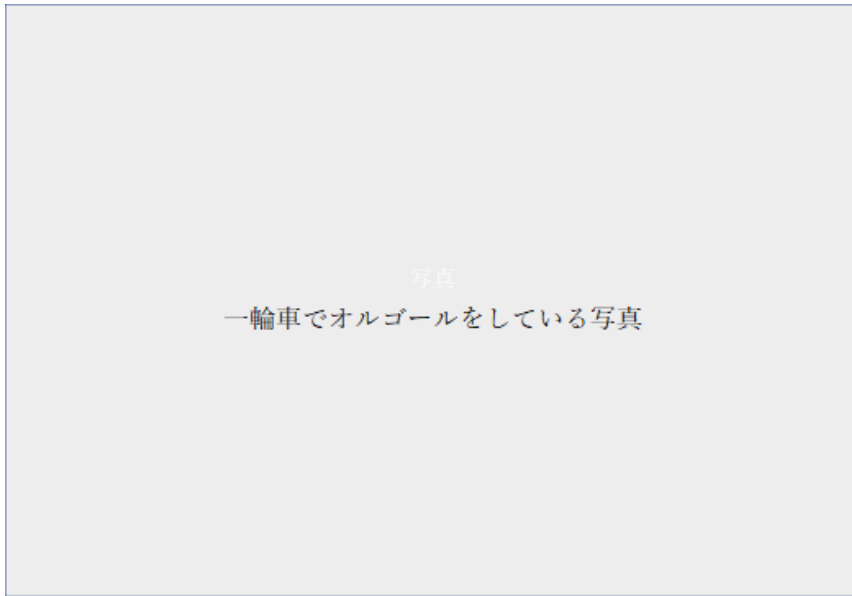
■事例記載見本■

(1) 事例1 「一輪車でオルゴール」(5歳児 11月)

ー目的を共有して試行錯誤する姿を見守ることの大切さー

① 幼児の活動に見られる遊びのプロセス

5歳児の後半、様々な運動遊具を使いこなすようになり、カッコイイ仲間の姿への憧れや少し難しい動きや遊びへの挑戦も、自分たちの育ちを実感しているようです。



○遊びの様子

一輪車で遊び慣れているA児、B児、C児は、近くで一輪車の技「オルゴール」(一つのフープを3人が持って回る)をしている子たちを見つけた。3人は、一輪車にうまく乗ることはできるが、オルゴールはやったことがなく、小さいフープでやってみることにした。しかし、何度試してもうまくできず、フープを大きいものに変えてみることにした。

もう少しでできそうになるが、B児が何回も転び、焦って余計にできなくなってしまう。そこで、A児とC児が、B児に優しく「ついてこられる？」と声をかけると、B児は、「ゆっくり回ってや」と言い、A児とC児はB児のペースに合わせてながらゆっくり回り始めた。しばらく失敗を繰り返したのち、うまく3人で回ることができて喜び合っていた。

② 環境の構成

- ・安全に遊べるよう配慮した様々な遊具を、幼児が扱いやすい場や位置に配置している。
- ・保育者は、幼児が協力して挑戦する様子を見て、見守ることにした。

¹ 事例記載見本は、当調査研究 有識者委員 岡上 直子 氏 (全国幼児教育研究協会 顧問) による作成。

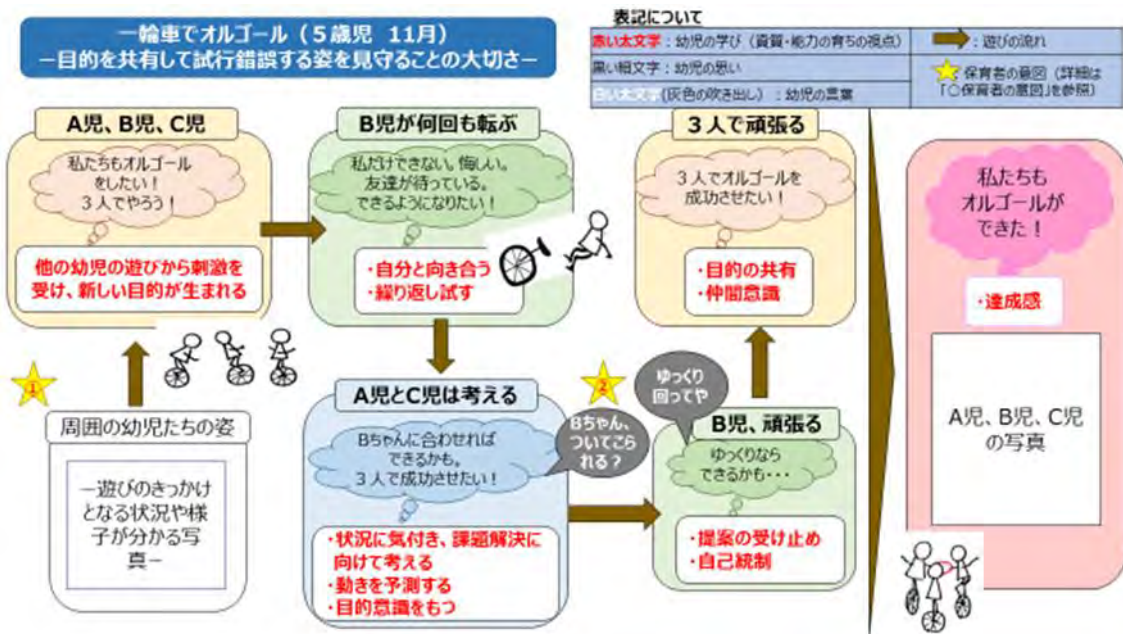
③保育者の意図と若手保育者の気付き

○保育者の意図

- ・失敗しても諦めずに、3人で力を合わせて試行錯誤し、目的に向かって集中して遊んでいる。幼児のその姿こそが仲間同士の関係を育てると考え見守ることにした。
- ・幼児が遊びに没頭し続ける（集中力継続）ためには、他の幼児にぶつかったり、使いたい遊具が見つからなかったりして、遊びが途切れるような状況を作らないことが大切。安全の配慮、幼児が使いそうな物（フープの種類等）を近くに置いておこう。

○若手保育者の気付き

- ・自分なら何度試してもできない時点で、ヒントをだしそう。そうすると、フープの大きさを変える工夫、B児への思いやり、3人で一緒にやり遂げた達成感はなかったと思う。
- ・B児が負い目を感じないように成功させてあげたいと思うが、手助けすることが、幼児にとっていいこととも限らない。幼児の意欲や思いの読み取りが大切だと思った。



④ワンポイントレッスン

- Q：試行錯誤しながら頑張ったこと自体が貴重な体験。これのできたのはなぜでしょう。
- A：・3人の目的共有、互いの力を知り受止め合う関係性、挑戦したくなる遊びの魅力です。
- ・それを支えているのが、自分にもできそうだという期待感と、保育者の見極めです。

⑤小学校教員の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ

- ・子供の力を発揮させるためには、自分で考え、やってみる時間を十分に与えることが大切だと思った。スタートカリキュラムでの柔軟な時間の使い方を見直したい。
- ・5歳児になると、うまくいかない場面で「できない自分」と向き合い、友達と一緒に乗り越える体験を繰り返すことで自立に向かい、自己統制、協同性につながると思った。
- ・事例に教師の言動がないのが不思議だったが、子供の学び合いの尊重だと納得した。

(2)プレ調査の実施

有識者委員の所属する園に、プレ調査として事例記載フォームへの記載を依頼し、実際の実取組について記載していただいた。また、委員に記載していただいた事例は、見本として、事例記載フォーム・依頼状と合わせて事例収集の対象園に配布した。

(3)事例収集対象の選定

事例収集先は、有識者委員のご推薦、自治体（幼保小架け橋プログラムの委託先及び幼児教育推進体制の実施自治体等）や、幼児教育関連団体等とし、事例フォームへの記載を依頼し、16園から協力の承諾が得られた。

(4)本調査の実施

事例収集の対象とした16園に対し、電子メールにて依頼状・事例記載フォーム・事例記載見本の電子ファイルを送付し、事例収集を行った。提出ファイルは、事例記載フォーム（Wordファイル）、流れ図（PowerPointファイル）とした。

(5)実施期間

令和4年12月～令和5年2月

第2章 本調査を通じた事例

2-1 研修等における活用を目指して整理した事例

「はじめに」にあるとおり、本調査を通じて収集した事例は研修等で導入として活用したり、地域の方や他校種の教職員に対して幼児教育を解説する際にも活用したりすることが考えられる。そうした視点から提出いただいた事例を整理したものを掲載する。

【事例を活用するに当たって】

○ 3歳児、4歳児の事例の掲載

本調査では「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」を参考に、「幼児の活動に見られる遊びのプロセス」の視点から事例を収集している。「架け橋期」に当たる5歳児の姿はそれまでの学年における発達に応じた体験の積み重ねにより現れることから、3歳児、4歳児の事例も収集し掲載している。

■事例一覧■

	事例タイトル	伝えたいこと	この事例のポイント	学年	掲載頁
1	泥って面白い！	とことん泥に向き合って感じることの大切さ	発達を見通す 3歳児の幼児らしいサインをキャッチする	3歳児 9月	13
2	こんな葉っぱ見つけた！	一人一人が安心して落ち葉を感じたり表現したりする楽しさを味わう援助	発達の時期を捉えた環境	3歳児 12月	15
3	色水遊びっておもしろい！	やりたいことにじっくり向き合える環境の構成	思わずやりたくなるような仕掛け	4歳児 4・5月	17
4	ボール転がし	自ら遊びださない幼児の「やりたい」を引き出す援助	学級の中で、今、援助が必要な幼児を捉える	4歳児 6月	19
5	水鉄砲でブロックを倒してみよう	幼児自身が考えた遊びを支える保育者の援助	発達を見通した幼児らしい遊びを捉える	4歳児 7月	21
6	忍者ごっこ「隠れ身の術～」	幼児同士が「つもり」を共有できるようになる発達を捉えた援助	幼児らしいサインをキャッチする	4歳児 10月	23
7	転がるっておもしろい（フープ転がし）	幼児にとって、遊びを生み出し、体の動きを引き出す環境	遊具のもつ特質や特性を理解し、幼児の関わり方を予測する	4歳児 11月	25
8	一緒に電車のジオラマ作ろう	十分に遊びを楽しめていない幼児への援助	幼児のアイデアや動きを引き出す	5歳児 5月	27
9	どうやって数える？	幼児の過去の体験や遊ぶ様子から、幼児への適切な関わりを考える	過去の体験と今の姿との関連を捉える	5歳児 7月	29
10	トマトを収穫 たくさんとれた！ いろいろな色や形で楽しいな	幼児の興味や関心が広がるような環境の構成	環境のもつ特性を理解し、幼児の関わり方を予測する	5歳児 8月	31
11	本物のようなカメラをつくりたい	幼児の思いを見守り、幼児が自ら考えるきっかけとなる物をさりげなく準備	思わずやりたくなるような仕掛け	5歳児 9月	33
12	エルマーみたいな服を作りたい！	幼児が気持ちを切り替え、思考を深める保育者の関わり	過去の体験と今の姿との関連を捉える	5歳児 11月	35

○ 事例作成上の主な工夫

事例の作成、整理に当たり、以下の点に留意している。

- ・事例のメインタイトルは幼児の活動の視点から、サブタイトルは若手教職員に気付いてほしいことや考えてほしいことの視点から記述する。
- ・遊びがイメージしやすいように、写真を用いてできるだけ端的に記述する。
- ・事例の解説はサブタイトルに焦点を当て、「教職員の意図」や「若手保育者の気づき」をまとめる。

○ 園内研修における活用の想定

園内研修における活用は以下のようなことが想定される。

- ・若手教職員の様子に応じて管理職や先輩教職員が事例を選んで紹介し、読んでみた感想や気づきについて話し合う。その際、具体的な場面とのつながりを理解できるよう当該若手教職員の実践や園内の同様の実践と関連付けて考えられるように促す。
- ・園内研修において全体で考えたいテーマに関する事例を取り上げ、重要なポイントを確認し共通理解する。さらに、事例を手掛かりとして各教職員の経験を想起できるようにし、テーマに沿った具体的な場면을語り合ったり若手教職員の困っていることを皆で考えたりする。事前または当日に当該事例を読む時間を一定程度確保した上で行うと効率的である。
- ・園内研修の時間が取りにくい場合は、共通のコーナーに事例を掲示しておき、感じたことや各教職員が大切にしていること、園内で行われている類似の場面などについて各自が付箋紙に記入して貼付することも考えられる。
- ・学年会において同じ学年の事例を取り上げて協議し、押さえておきたいことや自園における遊びや生活との関連についての共通理解を図ったり、指導計画作成の参考としたりする。
- ・若手教職員同士で関心のあるものを選んで読み合う。
- ・本事例集で試行した焦点化やまとめ方で使いやすい部分を園の実情に応じて活用し、記録や資料を作成する。

2-1-1 取組事例の紹介

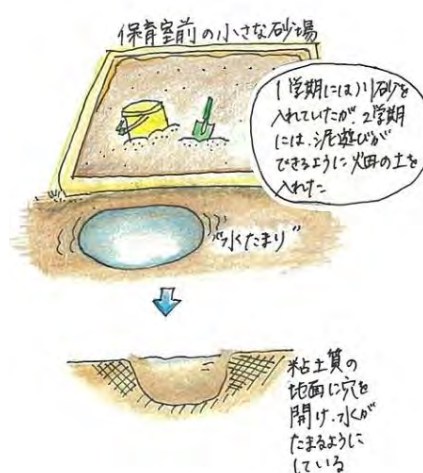
(1)事例1 「泥って面白い！」(3歳児 9月)

—とことん泥に向き合って感じることの大切さ—

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

砂、土、水等の素材と出会い、繰り返し自由にかかわる中で、ザクザク、ドロドロ、トロントロン等の感触を味わったり、土や砂の状態が変化する様子を楽しんだりしています。

※ この園では、3歳児の保育室前に小さな砂場を設置しており、9月には泥遊びを思いきり楽しめるように、この砂場に砂ではなく土を入れてあります。砂場というより泥遊び場といった状況ですが、幼児たちは「砂場」と呼んでいますので、ここでも砂場と表記しています。



○遊びの様子

A児が“水たまり”からカップで水を汲み、砂場に入れた土（以降、“土”と表記）にかけてスコップを使ってかき混ぜると“土”がザクザク、ドロドロ、トロントロンとした泥の状態になってきた。思わず左手をトロントロンの泥にうずめて触り、右手でスコップを使って周りの“土”をそこにかけた。そして、また左手で混ぜて表面をトントンと叩き柔らかさを味わい、そして、両手でかき混ぜて広げたり伸ばしたりし、かき集めて丸いトロンとした泥の塊ができると、持ち上げようとしたり押ししたり叩いたりを繰り返していた。

その横で、B児がA児の作った泥の塊の端をスコップで叩き始めると、表面に水が浮いて光ってきた。「先生、見て」と言って、その泥に“土”をかけて叩いてみせた。保育者も泥を叩きながら「音がするね、トントン」と笑うと、B児は指でトントンと触り始めた。保育者が泥を指で押して「穴があいちゃった」と言うのを聞いて、B児も泥に穴をあけていたが、“水たまり”に浮かぶ泥の泡を見つけて指ですくい出した。

②環境の構成

- ・ 1学期には川砂を入れていた砂場に、9月に畑の土を加え泥遊びができるようにした。

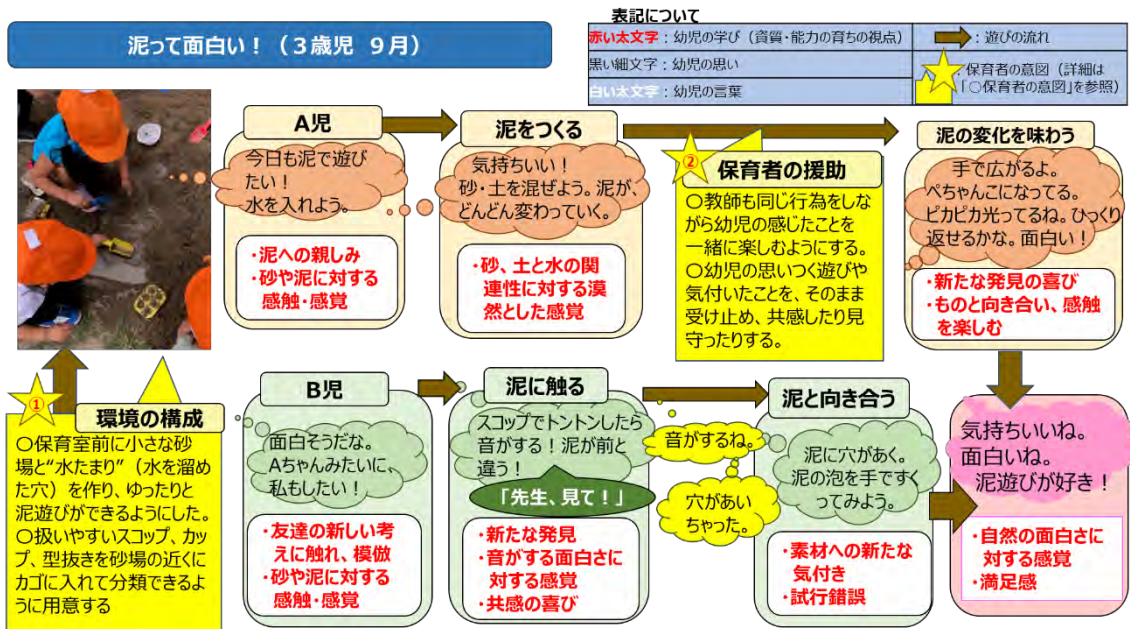
③保育者の意図と若手保育者の気付き

○保育者の意図

- ・幼児が「土」や水の変化を見つけて夢中になることが予想されるので、その姿を見守り、素材の感触を十分に味わえるよう、言葉をかけるのは最小限にとどめるようにした。
- ・幼児の「見て」という気持ちを受け止め、感触の違いや、砂・土・泥の変化していく様子から幼児が気付いたことを大切に捉え、一緒に楽しんだ。

○若手保育者の気付き

- ・保育者はすぐに「何をつくっているの?」と尋ねたり「○○みたいだね」と形あるものに見立てたりしがちだが、幼児が味わっている感触や変化する面白さに気付けるように一緒にやってみて共感していくことが感性を豊かにするために大切だと思った。
- ・感触を味わい一言も発せずに夢中になって遊ぶ中に、このように多くの学びの可能性があると気付くことが、保育者として大切だと改めて思った。
- ・砂や土の質を精選し、幼児と一緒に感触を味わったり、土を入れた場や“水たまり”を作ったりする工夫をしてみたいと思った。



④ワンポイントレッスン

Q：3歳児は、自分の感じていることや楽しんでいることを言葉で表現しないこともあります。どうすれば、幼児の思いに近付くことができるのでしょうか。

A：・保育者自身も砂、土、水に触れて試行錯誤し、特性を知ったり心を動かされたりする体験をして、その感触や楽しさを味わいましょう。その感触や楽しさの実感が、幼児の楽しみ処に気付き、幼児の思いに近付くことにつながります。

- ・一言も発せずに何かを感じ感触を味わっている姿は、この時期ならではの姿と言えます。とことん泥と向き合い、一心に何かを感じている姿を大切に受け止めましょう。

(2)事例2 「こんな葉っぱ見つけた！」(3歳児 12月)

—一人一人が安心して落ち葉を集めたり表現したりする楽しさを味わう援助—

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

築山や木立の中で落ち葉をかごいっぱいについたり、落ち葉でブレスレットや冠などを作ったりして遊び、時折、きれいな色や形の落ち葉を取り合う姿もあります。



○遊びの様子

幼児が気に入った落ち葉を自分のものとして持っていられるように、保育者が「バッグをどうぞ」と、紐を通した透明のビニール袋を一人一人に渡すと、幼児たちは「私のバッグや!」と喜んで肩に掛け、園庭の木立に走っていった。保育者も行ってみると「先生、赤いモミジがいっぱい落ちてる!」「ここにもある」と次々と葉を拾い、自分のバッグに入れている。「どうして赤いモミジさんいっぱい落ちてるんだろう」と問いかけると、A児やB児が、「寒い風がサー、サーって吹くから、変身するんだよ」「いっぱい落ちるんだよ」と言う。

築山でも、「ギザギザの葉っぱだ」と言ったり、「大きい葉っぱ、見つけた」「Cちゃん、いっぱい見つけたね」などと言いながら、いろいろな葉をバッグに入れる幼児の姿がある。

木立の中に画用紙やセロハンテープ、ペン、モールなどを用意したテーブルを置いておくと、バッグから「赤い葉っぱ、きれい」と言いながら落ち葉を出し、画用紙に貼り始めた。

②環境の構成

- ・落ち葉を見つけたら拾ったりして楽しめるように、落ち葉は掃き集めないままにする。
- ・自分が拾った落ち葉に愛着を感じられるよう、個人用のバッグを用意する。



③保育者の意図と若手保育者の気付き

○保育者の意図

- ・色付いてきた木の葉や落ち葉に関心をもって遊んでいる幼児の姿を捉え、落ち葉を清掃せずそのままにして落ち葉拾いができるようにするなど、適時、環境を整えた。
- ・個人用のバッグ (ひもを通した透明のビニール袋)を用意し、自分が集めた落ち葉の色や形、量などが分かりやすくした。
- ・葉の色や形の面白さなど、幼児の発見や気付きや喜びに共感し、幼児がその思いを自分なりの言葉で伝えたり表現したりするよう、心の動きを探りながら言葉かけを工夫した。

○若手保育者の気付き

- ・落ち葉を掃かずそのままにしておくことも環境として大切なときがあることが分かった。このように遊びにつながる予想を立てながら環境の構成を考えてみたい。
- ・個人用のバッグを持ったことで、自分が拾った落ち葉に親しみがわいたと思う。バッグは中身が見えるので他児への刺激にもなっていた。私なら入れ物に絵を描いたり飾り付けたりしてしまいそう。これからはこういう幼児の姿を見通した援助を考えたい。

④ワンポイントレッスン

Q：幼児たちが、落ち葉の美しさや形の面白さに関心をもちながら、触れたり表現したりする楽しさを味わえたのはなぜでしょう。

A：3歳児なりに美しさや面白さを感じている姿を、保育者が大切にしたからです。また、「皆で集めたもの」と「自分が集めたもの」の区別がはっきりしていない幼児の状況に気付き、集めた葉を自分のものとして持ち運べるバッグを提示したことで、幼児たちが安心して落ち葉に触れたり表現したりして楽しむ姿につながったと考えられます。

(3)事例3 「色水遊びって面白い！」(4歳児 4・5月)

ーやりたいことにじっくり向き合える環境の構成ー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

4歳児に進級した幼児たちは、今までの経験に加え、新しい物や道具との出会いによって遊びの幅が広がっています。色水遊びなどの興味をもったことを繰り返し試して遊ぶ姿が見られています。



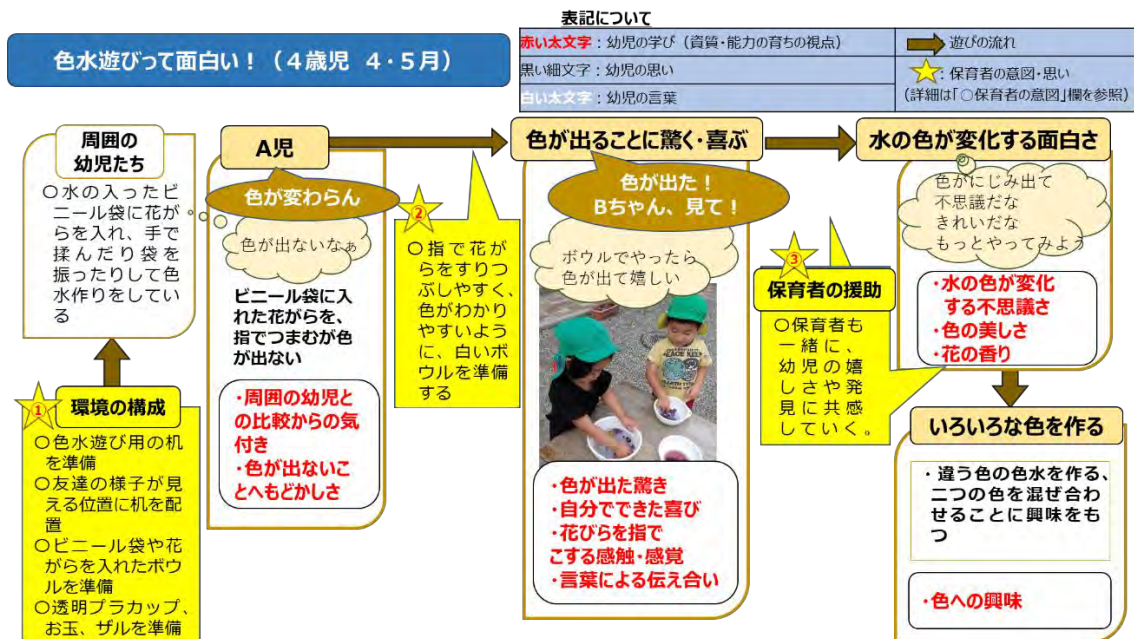
○遊びの様子

幼児たちは、水の入ったビニール袋に花がらを入れて、手で揉んだりビニール袋を振ったりして色水を作っていた。A児は、色を出すことが難しく、「色が変わらん」と保育者に訴えた。保育者は、指先で花びらをつぶしやすく、花びらから出る色が分かりやすいように、白いボウルをさりげなくA児に「こういうのはどう？」と差し出した。A児は「ちょうだい」とボウルを手に取り、喜んで取りかかった。指で花びらをつまんでつぶすようにしてみると、花びらから色がにじみ出てきた。その色が透明な水の中で広がっていく様子を見ながら、思わず「(花びらから) 色が出た!」「Bちゃん見て!」とB児に嬉しそうに伝えた。保育者もそばで「色が出たね!」と一緒に喜んだ。

毎日、繰り返し色水遊びを楽しむうちに色の異なる色水を作って比べたり、「これとこれ(二つの色)を混ぜたらどうなるかな」と色の混ざり方にも興味をもったりする姿があった。

②環境の構成

- ・幼児の目につきやすい場所に色水遊び用の机を並べ、花がらを入れたボウルや白いボウルをカートに入れて準備した。
- ・作った色が目で見て分かりやすいように白い容器(大小)や透明のプラスチックカップ、色水を移し替えるなど自分で扱いやすいようなお玉、花がらをこすためのザルも準備した。



③保育者の意図と若手保育者の気付き

○保育者の意図

- ・花びらなどの自然物を使って色水を作る楽しさや面白さを十分に感じてほしい。そして、気付いたことや嬉しかったことを友達と伝え合う経験をしてほしい。
- ・偶然にできる色の美しさや、花びらから色がにじみ出る驚きや感動を共有する。

○若手保育者の気付き

- ・幼児が興味をもった遊びを楽しめるように環境を準備していても、幼児が自分で思うように道具を扱えないと楽しめなくなってしまう。扱いやすいもの、目で見て分かりやすいものなど、その遊びに適した道具や素材を準備することが大切だと思った。
- ・幼児は、花びらから色が出ることに素直に驚き、繰り返し色水を作ることを試していた。じっくりと遊ぶことができる場の設定や友達が取組が見える机の配置を考えることや、保育者の共感的な関わりがとても大切だと思った。

④ワンポイントレッスン

Q：A児は色水遊びを通して、どのような体験をしていたでしょう。

A：A児は、水の入ったビニール袋で花びらの色をこすり出す方法は難しく、色が出せませんでした。きっと、A児にはビニール袋だとうまく花を押しつぶせず、色が出にくかったのかもしれませんが。白いボウルにしたところ、机上に置き、指ですりつぶしやすかったので水の中で色が広がる様子がよく見え、言葉にはならないその美しさを感じながら取り組むことができました。自分で扱え、変化が目で見えて分かりやすい道具を用意したことが驚きや感動などにつながったと考えられます。

(4)事例4 「ボール転がし」(4歳児 6月)

ー自ら遊びださない幼児の「やりたい」を引き出す援助ー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

4歳児に進級して2か月が経ち、学級の幼児たちは、保育室にも慣れ、思い思いに自分のやりたい遊びを見つけて友達と一緒に遊ぶことが楽しめるようになってきています。



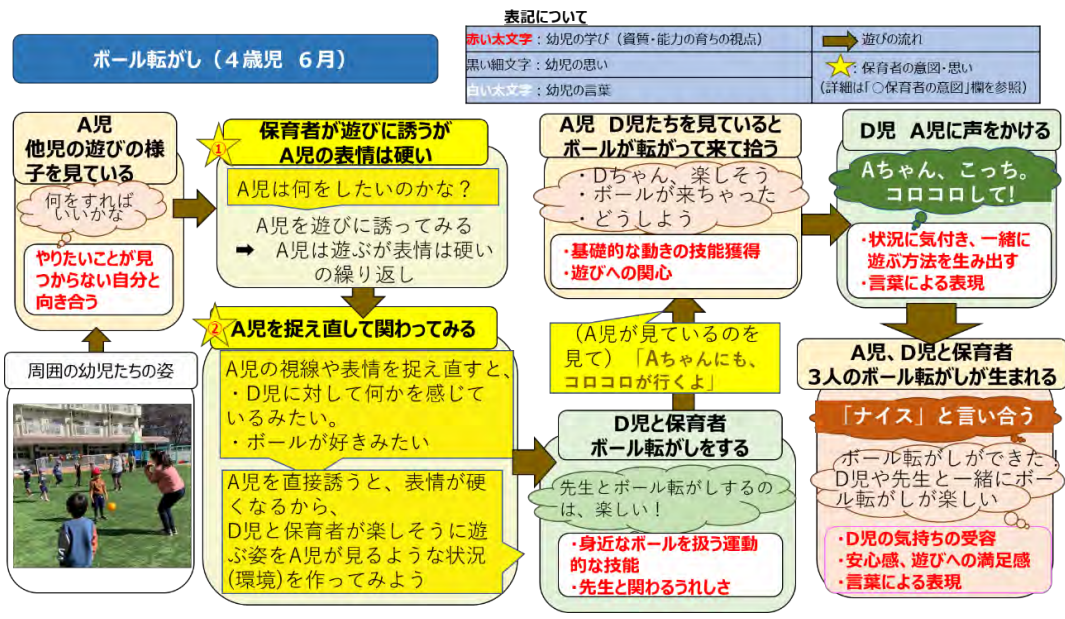
○遊びの様子

A児は、他児の遊びを佇んで見ていることが多いため、保育者は、A児が好みそうな遊びに誘うが、A児の表情は硬いままである。先輩の保育者から、「A児の興味を探り、自分から遊び始められるタイミングを見極めることも大切よ」との助言を受け、記録を基に改めて捉えてみると、A児はD児をよく見ていることや、ボールには関心があることに気付いた。そこで、保育者は、初めにD児とボールで遊び、きっかけをつくることを考えた。

保育者とD児がボールで遊んでいると、A児はしばらくこちらを見ていたが少しずつ近づいてきたので、保育者が「A君にもコロコロが行くよ～」とボールを転がすと、A児は反射的にボールを受け止め、戸惑った表情を見せた。それを見たD児が「A君、こっちコロコロしてー」と声を掛けると、A児の表情がほころびD児の方に転がし、保育者の「ナイス」の言葉で、A児、D児、保育者の三人でボール転がしが始まり、A児、D児がキャッチするたびに「ナイス!」「上手い!」と声を掛け合いながら繰り返し楽しんだ。

②環境の構成

- ・A児に見える所に、A児が気になっているD児と保育者が楽しそうに遊ぶ状況を作った。



③保育者の意図と若手保育者の気付き

○保育者の意図

- ・ A児が、どのような遊びに興味や関心があり、どのような状況なら遊びを楽しめるのかを知るためには、A児の表情や人への視線の向け方などを捉え直してことにした。
- ・ 保育者の思いで、様々な遊びに誘うのではなく、A児が「やりたい」と思う遊びを考えてA児自身が自分から遊び始めるきっかけをつくってみよう。

○若手保育者の気付き

- ・ 自分から遊びだしてほしいと様々な遊びに誘ったが、A児の興味や関心と合致していないと、幼児は楽しめない。こんなときこそ、A児のささいな言動にも注意を払って少し時間をかけてA児の興味や関心を探ることが大切だと思った。
- ・ 保育者がボール遊びに誘うと受け身的になってしまうかもしれない。A児には、遊びだすきっかけが必要だったのだと感じる。気になっていたD児が自分の好きなボール遊びを保育者と楽しんでいる様子を見て、「一緒にやりたい」という思いが募ったのだろう。だから、いつもは佇んで遊びを見ているA児が近づいてきたのだと思う。

④ワンポイントレッスン

Q: 保育者が様々な遊びに誘っても自分からは遊びださなかったA児の姿を、どのように理解したらよいでしょう。

A: A児は何もしていないのではなく、D児が気になり、そばで見ていることで自分も参加しているような気持ちになっているとも考えられます。また、やりたいと感じているけれどそれを自分ではまだ意識しておらず、参加せずに自分と向き合っていたのだとも考えられます。その思いに保育者が気付き、A児の近くでD児と楽しそうにボール遊びを始めて、近くでじっと見ているA児にもボールを転がしたことで、A児は自然と体が動き、タイミングよくD児が「こっち、コロコロしてー」という言葉があったことなどが、A児が遊びに加わり楽しむきっかけになったと考えられます。

(5)事例5 「水鉄砲でブロックを倒してみよう」(4歳児 7月)

ー幼児が思い付いた遊びの面白さを支える保育者の関わりー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

自分の思いを出しながら、友達との遊びが少しずつ深まってきて、友達がしていることが刺激となり、自分も試してみようとする姿が見られます。



○遊びの様子

幼児たちは、発砲スチロールブロック（以下「ブロック」とする）を縦や横に積んで遊ぶことを楽しんでいましたが、A児、B児、C児と一緒に水鉄砲で遊び始めた。A児がブロックを積み重ねて「30秒で倒してみよう！」と、B児とC児に声をかけ、カウントを始めた。B児は急いで水鉄砲に水を入れて撃つが、1回では倒れず、2回目によりやく倒れ、カウントもぴったり30だった。A児とB児は「やったあ！」と喜んだが、C児は、“30で倒す”ということがすぐに理解できていなかったようで、A児とB児のやりとりを見ていた。

そして、A児がブロックを組み直して、「30数えるよ〜！」と声をかけると、C児が水を入れ始めた。A児が数を数え始めたので、そばにいた保育者は、A児のワクワクした声に合わせるように一緒に数を数え始めると、C児は水鉄砲を勢いよく撃つたのでブロックは1回で倒れた。A児は「C君、早いね」と声をかけ、3人でブロックが倒れたことを喜び、その後、何度も繰り返していた。

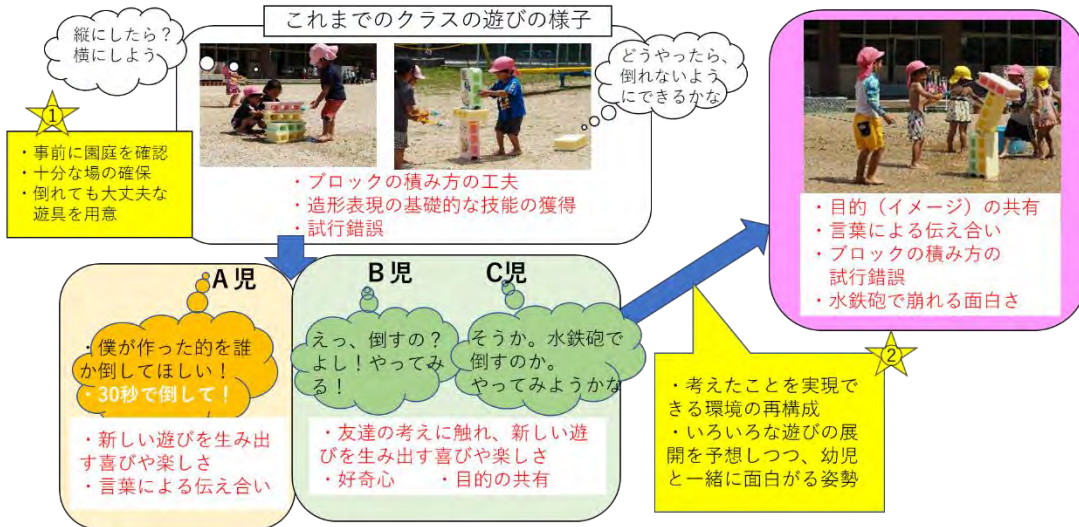
②環境の構成

- ・十分なスペースの確保、倒れても大丈夫な遊具を用意する他、事前に園庭に危険なものが落ちていないかなどを確認し、安全に遊ぶことができるように準備した。
- ・水着に着替えるなど、水がかかっても思いきり遊ぶことができるようにした。

水鉄砲でブロックを倒してみよう（4歳児7月）

表記について

赤い太文字：幼児の字（資質・能力の育ちの視点）	：遊びの流れ
黒い細文字：幼児の思い	★：保育者の意図（詳細は「○保育者の意図」参照）
白い太文字（灰色の吹き出し）：幼児の言葉	



③保育者の意図と若手保育者の気づき

○保育者の意図

- ・ A児が水鉄砲でブロックを倒す遊びを思いつき、B児、C児に声をかけて遊び始めた。その姿を大切に、ブロックを倒す遊びをB児たちと一緒にしたいというA児の思いが二人にうまく伝わるように援助したいと考え、様子を見守ることにした。
- ・ B児の様子を見てC児が水鉄砲に水を入れ始めたので、保育者は、C児の行動を後押ししたいと考えた。そこで、ブロックを倒してほしいと期待しているA児の思いがC児に伝わるように、A児の声に合わせて一緒に数を数えながら、C児が水鉄砲を撃つのを待った。

○若手保育者の気づき

- ・ 幼児から出てきた遊びに、保育者が仲間になって一緒に遊びを楽しみながら、A児たち3人が遊び方を共有していけるようにしていくことが必要なのかもしれないと感じた。
- ・ C児のように遊び方を理解できていない幼児がいると説明したくなる。しかし、すぐに言葉で教えるのではなく、この遊びの中の援助のように、保育者がA児と一緒に数を数えることが、C児に遊び方を伝えることにもつながったということが分かった。

④ワンポイントレッスン

Q：幼児にとって、この遊びの面白い点、楽しい点はなんでしょう？

A：幼児たちは、ブロックが倒れないように考えながら積んでいく楽しさを味わっているうちに、A児が水鉄砲で撃って倒すことを思いつきました。そして、積んだブロックを手で押し倒すのではなく、水鉄砲の水で倒れることが面白くなったのだと思います。このような好奇心に満ちた体験を十分に味わえるようにすることが大切です。

(6)事例6 「忍者ごっこ『隠れ身の術』」(4歳児10月)

ーイメージ(〇〇のつもり)を自分なりに表現する楽しさ味わう援助ー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

忍者の服や手裏剣、刀を作って忍者ごっこを楽しんでいましたが、忍者に関する図鑑の中に「隠れ身の術」を見つけて、積み木やござ、布切れなどを使い“忍術”を楽しんでいます。



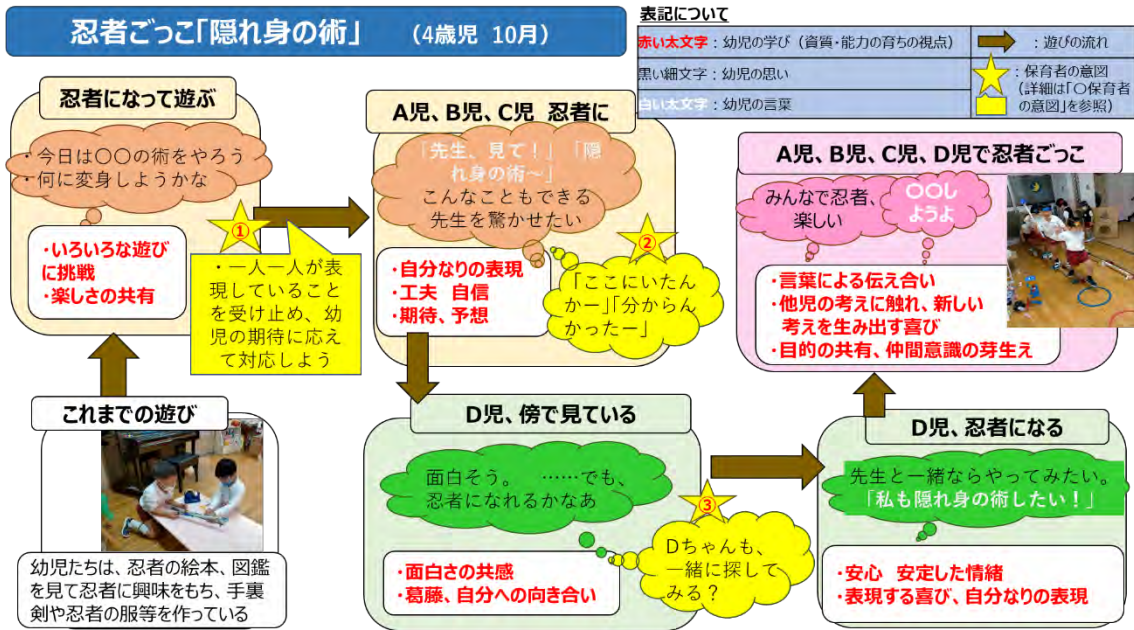
大きな木の前で、B児がござシートを頭からかぶるようにして全身を隠し、
隠れ身の術をしている場面

○遊びの様子

忍者ごっこをしている所に保育者が通りかかると、どこからか「どこにいますか？」という声。「えー、声は聞こえるけど、どこかなー」と保育者が探す振りをしていると、A児「ここやでー」と木の後ろから顔を出す。保育者「ぜんぜん分からなかったー。すごい術やね」。B児「僕も。先生見ててや。隠れ身の術〜」と立ってござシートを頭からかぶり自分の身を隠した。C児は、「隠れ身の術〜」と自分がじっと目をつぶったまま立っている。この様子を近くでD児がにこにこしながら見ている。保育者「あれー、さっきまで見えていたのに、どこかな？ Dちゃんも一緒に探してみる？」と声をかけると、D児はうなずき、実際は分かっているのに「全然どこにいるかわからんわー」と応じている。そして、C児「ここでしたー」と目を開けて動くと、保育者と「壁かと思ったねー」と気付かなかった振りをしている。D児は、しばらくは他の幼児が何度も「術」をかけに来るのに応じていたが、「私もやりたい！」と言って、隠れ身の術で身を隠した“つもり”を何回も楽しみ始めた。

②環境の構成

・「忍術」に必要な用具を予想し、すぐに使えるようにいくつか見える所に用意した。



③保育者の意図と若手保育者の気づき

○保育者の意図

- ・幼児には、生活や遊びの中で使っているものを活用して遊びの場や必要なものを作ってほしい。積み木や新聞紙やござは、幼児の体を隠す大きさとしてちょうどよかった。
- ・身に付けるものは自分で作り、遊びたいときにはすぐに身に付けて友達と一緒にイメージを共有して遊べるよう、使いやすい場に置いたり片付けたりできるようにした。
- ・幼児が思いを出して遊べるよう、一人一人の幼児が考えた「術」の表現(つもり)を面白がって受け止め、何かが起こることを期待する気持ちを表現するようにした。

○若手保育者の気づき

- ・自分だったら「隠れるの上手だね」などと幼児の姿を認めるだけで終わりそう。一生懸命隠れている幼児に保育者が真剣に相手になって向き合うことで、幼児の心が弾み、もっとやってみようという気持ちが高まっていく様子が具体的にイメージできた。
- ・自分が目をつぶっても相手には見えるのに、C児は隠れ身の術をしているつもりらしい。自分に見えないことは、他者も同じように見えないと思っているのだろうか。
- ・そばで見ていた幼児には、「忍者になってみる?」と直接誘うのではなく、まずは保育者と一緒に遊び、楽しさを感じるようにすることの大切さが分かった。

④ワンポイントレッスン

Q: そばで見ていた幼児が、自分の思いを出して遊ぶようになったのはなぜでしょう。

A: 幼児の中にはC児のように「隠れ身の術〜」と言って自分がじっと目をつぶったまま立っている幼児もいます。他者から見れば隠れていないのですが、そんな姿もそのまま受け止め、幼児一人一人の表現に応答している保育者や他の幼児の姿をみて、安心して自分なりの思いを表現することができたのだと思います。

(7)事例7 「転がるって面白い！」(4歳児 11月)

ー遊びを生み出し、体の動きを引き出す環境ー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

築山の頂上からフラフープを転がして偶然、倒れずに転がっていくことを発見。転がるものを走って追いかけたりキャッチしたりしながら、簡単なルールを作って遊び始めました。



○遊びの様子

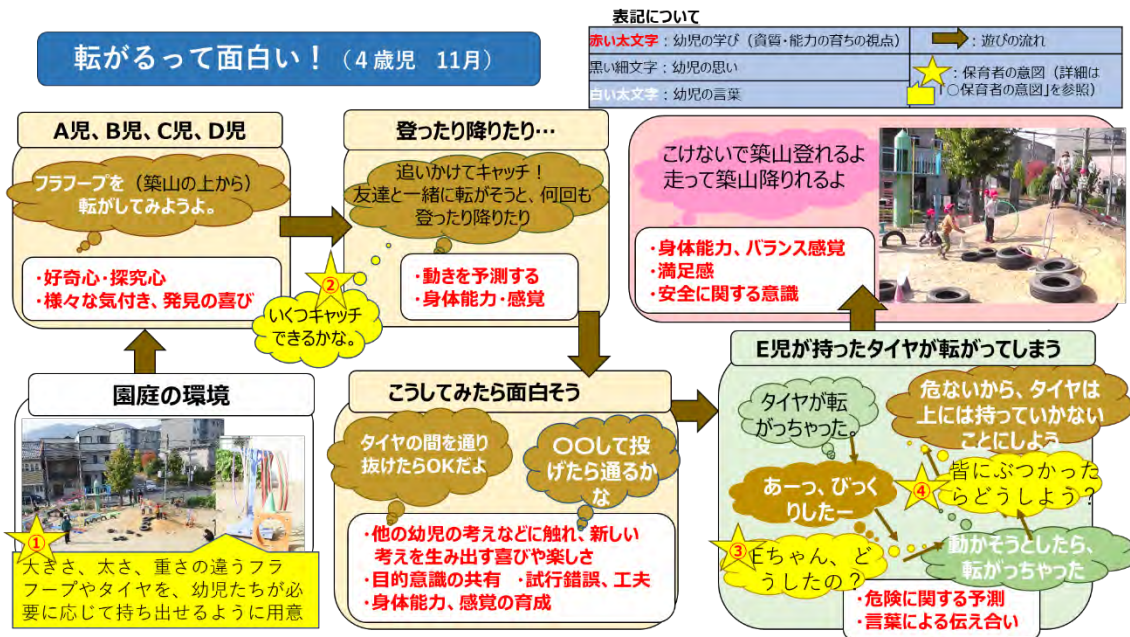
園庭の築山に登ったり降りたり穴を掘ったりして遊んでいた4人の幼児が、フラフープを見つけ、築山の頂上から転がし始めた。転がっていくフラフープを追いかけてキャッチしたり、友達とタイミングを合わせて転がしたりして、何度も繰り返し楽しんでいた。

2、3日すると、友達の転がしたフラフープを築山の下で待ち受け、いくつキャッチできるか試したり、転がる先にタイヤを並べ、タイヤにぶつからずに通り抜けるとOKなどとルールを作ったりして遊び始めた。友達にキャッチされないように、築山の上を移動したり、フラフープを放す手の力を加減したりしながら、ねらって転がす姿が見られた。

それを見ていたE児がタイヤを転がしながら築山を登り始めたが、手が放れてタイヤが勢いよく転がったので周りの幼児は驚いた。タイヤを高いところから転がすと危険なので、保育者は、幼児たちにタイヤの扱い方について問いかけ、皆で安全な遊び方について考え、築山では、タイヤは転がさないようにしようと約束した。

②環境の構成

・転がり方の違いに気付けるようにサイズの違うフラフープや、重さの違いを感じるタイヤなどの道具を、幼児たちが必要に応じて持ち出せるよう用意している。



③保育者の意図と若手保育者の気づき

○保育者の意図

- ・フラフープやタイヤとの関わりから生まれる一人一人の幼児の気づきを読み取り、それぞれの幼児が面白がっていることを十分楽しめるよう、幼児たちと同じ動きをしながら言語化したり共感したりするようにした。
- ・幼児の思いつく遊びを受け止めながらも、フラフープ等の転がり方によっては他の幼児の背中にぶつかったり足に引っかかったりすることも考えられるので、安全に留意しながら見守り、必要に応じて援助するようにした。

○若手保育者の気づき

- ・遊びの中の学びを見てみると、バランスを取りながら斜面を歩く、フラフープを運びながら登り降りする、フラフープの行先を目で追う、友達とフラフープのやりとりをする、重いタイヤを運ぶなど、築山を拠点にして様々に体を動かす遊びをつくり出している。
- ・このような遊具を使用する場合には、体を動かし試してみたいことが実現できる環境を整えることも大切だが、幼児の遊びの様子を見守り、幼児と一緒に安全な遊び方について考えたり、意識付けたりすることが大切なのだと感じた。

④ワンポイントレッスン

Q：4歳児の幼児が、次々と自分たちで遊び方を工夫していったのはなぜでしょう。

A：幼児は、周囲の様子から刺激を受け、新しい遊びを思い付いたり自分の遊びに取り込んだりします。日頃から幼児のやってみてみたい気持ちを受け止め、一緒に面白がってくれる保育者の存在があり、同時に、危険が予測される時には、安全に関する意識を育みながら幼児の遊びを見守る援助があったことが、遊びの工夫につながったのだと考えます。

(8)事例8 「一緒に電車のジオラマを作ろう」(5歳児 5月)

ー十分に遊びを楽しめていない幼児への援助ー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

幼児はこんな遊びをしたいといったように、遊びを通して自分の思いを実現する中で充実感をもち遊ぶようになっていく。しかしそうした思いがないと、遊びが見つからずに漫然と過ごし、遊びを楽しみ深めることができないこともある。

では遊びが見つけれない幼児に対して、保育者はどのような援助をしていくとよいのだろうか。この事例は、保育者が遊びの提示をしたことをきっかけに、自分のやりたいことを見出し、友達と共通の目的を共有し、試行錯誤しながら自分や友達の思いを実現する事例である。



○遊びの様子

年中の時から牛乳パックやキングブロックなどを使って電車作りを楽しんでいた4人の幼児。年長組になってからは、何となく一緒にいるものの、幼児同士で遊びに集中する様子がみられなかった。そこで担任が、幼児の興味・関心に沿った遊び「ジオラマづくり」に誘うと、A児「いいね!」、B児「俺知ってる、家にある」と、ジオラマづくりをやりたいという思いを共有し始めた。

担任は、ジオラマづくりに必要な素材(画用紙や段ボール等)を用意すると、自分たちの作りたいジオラマをイメージして素材を選び、4人で作り始めた。

②環境の構成

- ・4人の製作技能を踏まえ、製作コーナーに使いそうな素材を揃える。
- ・自分の思いを言葉で伝えあいながら遊びを進められるよう、友達と一緒に協力して作るのに適当な大きさのジオラマの土台(段ボール)を提示する。
- ・ジオラマづくりのイメージを具体的にもてるような、絵や写真を掲示する。



③保育者の意図と若手保育者の気付き

○保育者の意図

- ・しばらく様子を見ていたが、幼児だけでは自分のやりたい遊びを見つけないようだ。そこで今回は保育者から遊びに誘い、友達と思いを共有して遊ぶことの楽しさを知ってほしいと考えた。

○若手保育者の気付き

- ・幼児期の遊びは、幼児が自ら興味をもって環境に主体的に関わりながら展開していく「環境を通して行う教育」が基本であることを踏まえると、幼児の遊びが見つからない時に、どう援助すべきか迷うことがある。
- ・この事例では、保育者が遊びを提案しているが、幼児が何か楽しいことをしたいという思いと、電車が好きという興味や関心に合致していたので、幼児の主体的な活動につながれたのだと思う。幼児の思いに応じた援助の大切さを再確認した。

④ワンポイントレッスン

Q：遊びが見つからない幼児に、遊びを提示する援助にためらいがあるのですが。

A：幼児は他者の遊びを見て模倣しながら、遊ぶことの楽しさを感じることもあります。遊びのきっかけを保育者がつくることも、時に必要です。その際には保育者が全てを手伝い一緒に遊ぶのか、ヒントを与えるだけでよいのかなど、一人一人の幼児の発達に応じた援助の程度を考えることが大切です。

(9)事例9 「どうやって数える？」(5歳児 7月)

— 幼児の過去の体験や遊ぶ様子から、幼児への適切な関わりを考える —

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

園での遊びや生活を通して数える経験をしてきた5歳児。一学期後半、自分達が収穫したたくさんのジャガイモの数を知りたいと試行錯誤しています。



○遊びの様子

園庭で育てたジャガイモの収穫。たくさん収穫できたことに大喜びな幼児達は何個あるのか知りたくて、数えたくなったようだ。4人の幼児が、一列に並べて数え始める。A児が「1個、2個、・・・24個、27個」、B児が「24の次は25個だよ」といったやりとりが繰り返され、大きい数を数えられずにいる。

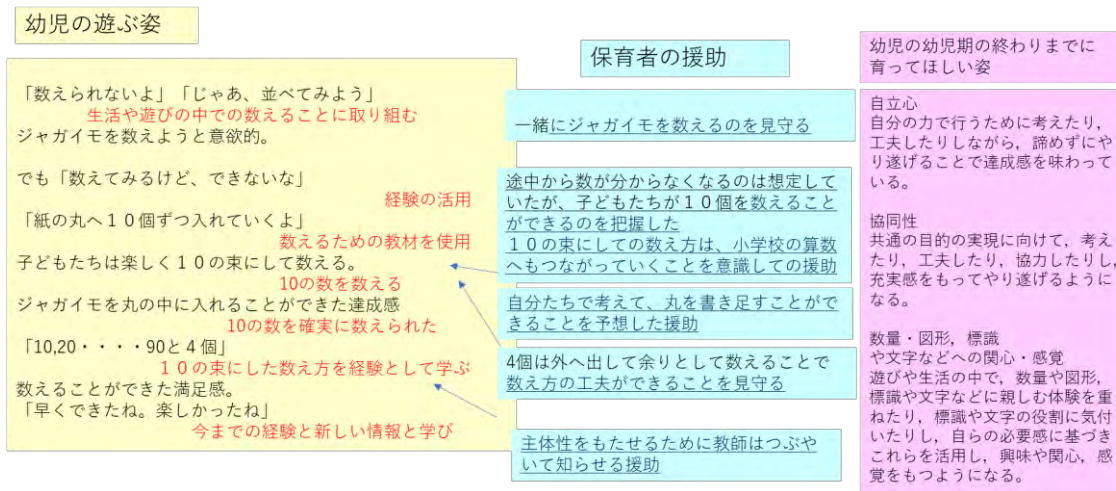
保育者は、しばらくして「みんなは10個を数えるのが得意みたい！10個ずつここへ入れてみるのはどう？」と、ジャガイモを10個程度置ける大きな丸を書いた紙を用意した。

幼児達は「1、2、3、・・・10個」と楽しそうに丸にジャガイモを入れる。ジャガイモを入れる丸が足りなくなると、自分達で丸を書き足した。全てのジャガイモを丸に入れ終わり、満足そうな幼児達。保育者は、「10個、20個・・・」とつぶやくと、幼児達は自ら「10個、20個、30個」と数え、「90個ある。ここ(丸の外)には4個」とにっこり。

幼児達は、自分達の手でジャガイモの数を知ることができて嬉しそう。教師は「すごいね。たくさんとれたね。この数え方は早かったね。」と子どもたちと話す。

②環境の構成

- ・ 幼児達の「何個あるか知りたい」という思いを大切にして、数え方のヒントを出した。
- ・ 数を数えた過去の体験を生かして、活動できるようにした。



③保育者の意図と若手保育者の気付き

○保育者の意図

- ・数えられるようになることではなく、数え方の工夫の面白さを感じられるようにした。
- ・友達と数えることを繰り返すが、大きな数を数えることに幼児達は行き詰っている。数は面白いと思ってほしいので、10個ずつまとめて数えることをヒントにだした。
- ・10個は楽しく数えられていることを確認し、できていることをほめながら、大きな数を数えるヒントを出すことで、幼児の意欲を高めた。
- ・さらに、ジャガイモの数より紙の丸の数を減らすなど、幼児が自ら考える余地も残した。
- ・保育者は、幼児と一緒に考え喜ぶことで、幼児がやりたい、楽しいと感じられるようにした。

○若手保育者の気付き

- ・幼児を見守るだけだと、できないからつまらなないと遊びが壊れてしまうし、すぐにヒントを出すと幼児が協力して試行錯誤する機会を奪ってしまう。幼児の過去の体験を踏まえた、ヒントのタイミングと内容が大切だと思った。
- ・ヒントはスモールステップで、やりたいという思いを引き出しながら、時には、つぶやいたり、見本を見せたり、手伝ったりするとよいことが分かった。

④ワンポイントレッスン

Q：この事例で、幼児の状況に応じたヒントを出すことができたのはなぜでしょうか。

A：保育者は、沢山の収穫物を得た幼児達の喜びが、「収穫物の数」に対する強い興味を引き出していることに気が付きました。そして、保育者が「10は皆楽しく数えることができる」（実態）を捉え、幼児自身が自分たちでできる数え方を提示し、ヒント（楽しく数えられる環境）を出すことができました。

⑤小学校教員の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ

- ・数の面白さ、数の有用性への気付きを大切にしていると思った。園で培った数への興味や関心を、上手く小学校で伸ばせるとよい。

(10)事例10 「トマトを収穫 たくさんとれた!いろいろな色や形で楽しいな!」

(5歳児8月)

ー幼児の興味や関心が広がるような環境の構成ー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

春に植えた様々な種類の夏野菜の収穫。夏野菜のトマトが、いくつかあるか知りたくて並べてみました。すると、同じトマトでも形や色が違うことに気が付き、大きさや色で分けて楽しんでいます。



○遊びの様子

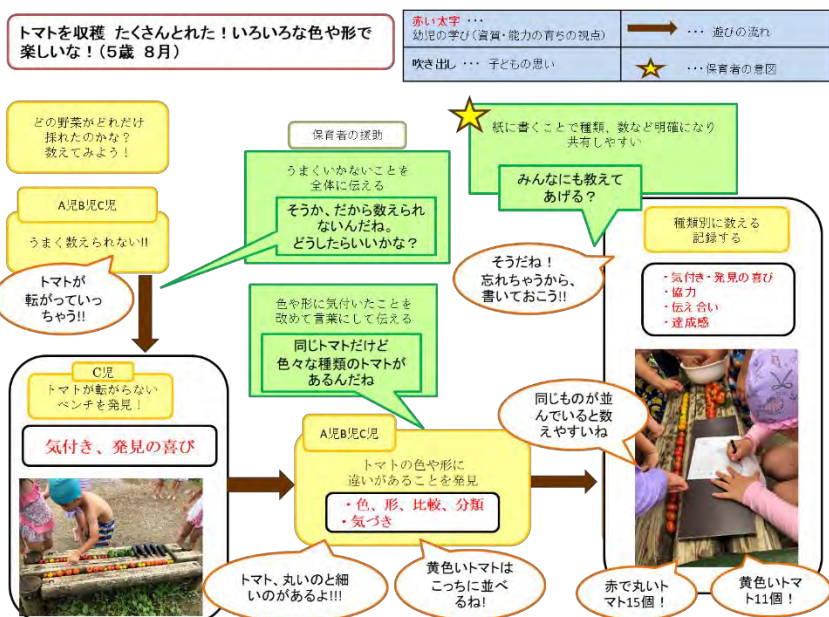
春に植えた夏野菜の収穫。一度に色々な種類の野菜がたくさん収穫でき、嬉しくて、それぞれに収穫し、テーブルに並べ始めたが、トマトが転がって上手く数えることができない。幼児同士で試行錯誤していたが、そのうち、A児が「ベンチ(の溝)に置いたトマトは転がらないよ」と皆に伝えた。

トマトを列にして並べていると、「黄色トマトはこっち側に並べるのにしよう」「あ、細長いトマトと丸いトマトがある!」と、色や形の違いも見えてきて、色や形で分けて並べ始めました。保育者は「すごいね。色々な色があるね。」と言うと、幼児達は、「こっちのトマトは真っ赤だ」「こっちのはあんまり赤くない」と言いながら更に並べていく。

保育者は「いい場所を見つけたね。トマトがきれいに並んでる。じゃあ、どこから数える?」と聞くと、B児は「大きな赤いトマトから数える」、C児は「黄色のトマトを数える」と言って、数え始めました。

②環境の構成

- ・いろいろな色や形のトマトを栽培する。
- ・収穫した野菜を置いたり、並べたりできるような用具(テーブル、ざる、かご、シート)など用意する。
- ・収穫した野菜を見合えるような場所を確保する。



③保育者の意図と若手保育者の気づき

○保育者の意図

- ・ 幼児の興味や関心が、トマトの数から色や形へと広がっていった。この興味や感心の広がりを大切に、もっと深めたい。「色々な色があるね」と言ってみたら、一つ一つの違いに関心もち、もっと楽しくなるかもしれない。
- ・ 友達と一緒に試行錯誤することを楽しんだり（協同性、思考力）、トマトの鮮やかな色に心惹かれたり（豊かな感性と表現）。単に数を数えるだけではなく、多様な体験をしてほしい。

○若手保育者の気づき

- ・ 色々な形や色のトマトを栽培して、一気に収穫したからこそ気付くことができたことだと思う。栽培する植物で幼児の体験できることが違ってくると思った。
- ・ これだけの活動でも、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」がいくつも見られる。しかし、自分は、分かりやすい姿しか捉えられないことが多く、芽生えのような姿を捉えにくい。幼児の言動を捉えるアンテナの感度を上げていきたい。

④ワンポイントレッスン

Q：本事例では、幼児の興味や関心を広げることができたのはなぜでしょうか。

A：色や形、数など、トマトの有する特徴を踏まえ、幼児が興味や関心をもちそうなことを様々に予想して、保育者は環境の構成をしたり、声を掛けたりしています。

⑤小学校教員の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ

- ・ 楽しいと感じながら数に関わる体験をすることで、幼児が、数を面白い、好きだと感じるように工夫していると思いました。
- ・ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、3要領・指針の文言通りの姿で現れるとは限らないんですね。
- ・ 幼児の興味や感心が広がると、小学校での学習意欲などにもつながると思う。

(11)事例11 「本物のようなカメラを作りたい！」(5歳児 9月)

ー幼児の思いを見守り幼児が自ら考えるきっかけとなる物をさりげなく準備ー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

作りたいと思ったものは、より本物のように再現したい気持ちが強くなり、細かい作業も根気強く作るようになってきた。また友達と話し合いながら作る面白さと、自分たちで作り上げる楽しさや充実感を味わっている。

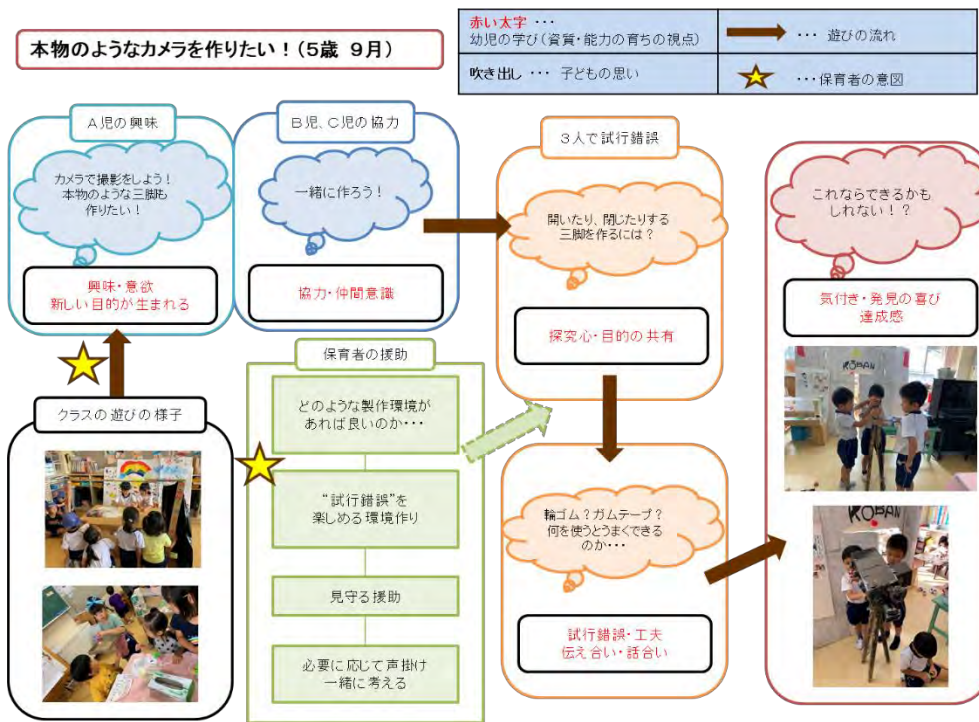


○遊びの様子

クラスで流行っているお店屋さんごっこの様子や、警察ごっこで起こる事件、アイドルのステージなどを、テレビごっこの中で放送するためにカメラで撮影しようということになった。興味をもったA児が空き箱を使ってカメラの製作を始めた。本物のカメラマンは三脚を使っていることを知り、友達と協力して三脚作りを開始した。A児「閉じたり開いたりするようにしたいな」B児「じゃあ棒を輪ゴムでとめてみる？」と試してみるがうまくいかない。C児の「ガムテープで巻いてみる？」というアイディアに「やってみよう!」と試してみることにした。「強く巻くと開きにくいな〜」「少しにしてみる?」「こっちの(紙ガムテープ)の方がいいかもしれない」と3人で話し合いながら、考えては試すを繰り返し、良い方法を見つけ出そうとしていた。

②環境の構成

- ・様々な廃材や素材を用意して、自分たちで考えて色々と試せるようにしている。
- ・使いながら、改善点を自分たちで見出し、工夫を繰り返して行ってほしいので、予想できることについても自分たちで気付けるように見守る。



③保育者の意図と若手保育者の気付き

○保育者の意図

- ・保育者が助言すればもっと簡単に三脚が完成する。しかし、それは幼児達がイメージした三脚ではなくなってしまう。いろいろな材料を使って試してみながら、自分達はどんな三脚を作りたいのか、そのためにはどの材料をどのように使えばいいのかを考えてほしい。
- ・試してみたい材料（輪ゴムやガムテープ等）を幼児の近くに置くことで、幼児自ら色々な材料を使って試してほしい。

○若手保育者の気付き

- ・保育者は見ているだけで、幼児達が、全部考えて行動していると思った。しかし、実際には、保育者が、幼児の近くに、試したくなる材料を準備していた。それらの材料が幼児の目に触れることで、アイデアを思い付いたのだろう。幼児の活動を予測して環境を構成することの大切さを感じた。

④ワンポイントレッスン

Q：幼児の主体的な活動を支える保育者の援助。ここで大切なことは何でしょうか。

- A：
- ・幼児の思いを大切に、幼児のペースでの試行錯誤を尊重して見守る姿勢です。
 - ・試行錯誤してほしいという保育者の願いは、幼児の周囲に準備する物、幼児の試したいという意欲を引き出す声掛けや雰囲気づくりなどに込めます。

⑤小学校教員の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ

- ・自分の思いを実現しようと色々な材料を様々に試すことで、その材料の特質を体験的に知り、図画工作の製作で生かされたりするのですね。
- ・時間を要しているが、自分達なりの答えを見つけています。こうしたことが、自分の力を信じて頑張ること、考えることの楽しさなどにつながっていると思った。

(12)事例12 「エルマーみたいな服を作りたい」(5歳児 11月)

ー幼児がうまくいかないことにも諦めずに、思考を深める保育者の関わりー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

5歳児の後半になると、これまでの経験を生かして、自分たちがイメージしたものを実現するために、つまずきながらも友達同士で考えを出し合い取り組んでいきます。



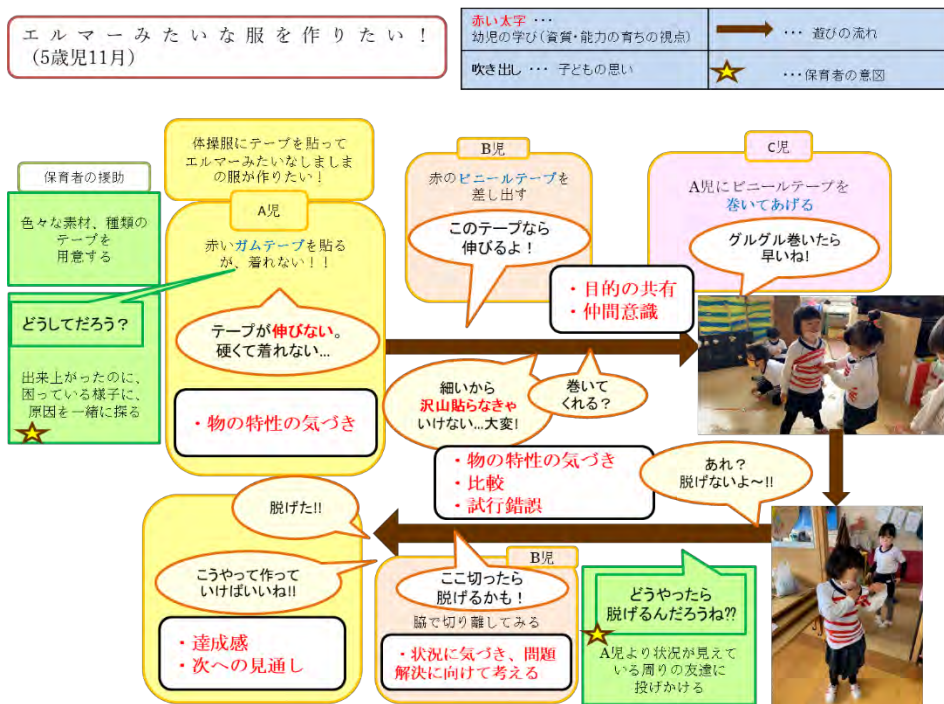
○遊びの様子

A児は、いろいろある粘着テープの中からガムテープを選んで、エルマーのように服がしましまの模様になるようにテープを貼った。しかし、着ることができなかった。その様子を側で見ていた保育者は「どうしてだろう？」と問いかけると、「テープが伸びなくて服が固くなっちゃった。せっかく貼ったのに着られない。」と残念そうにしている。すると、B児が「このテープなら伸びるよ」とビニールテープを持ってきた。A児は、途中まで貼り、試しに着てみた。今度は着ることができたが、「貼るところが多いから、大変!!」と言い、C児に、「Cちゃん、ぐるぐるに巻いて」と頼んだ。すると、今度は、脱ぐことができなくなった。「もう脱げないよう!」とうまくいかないことにいら立ちを感じている。教師は「どうやったら脱げるんだろうね」と声をかける。A児は自分の服を見つめる。B児が「ここが狭いから、ここを広くしたらいいのかも」と脇の下の服の縫い目の部分にあるテープに切り込みを入れて、服の前後で切って貼る方法を考えた。A児は「これなら脱げる!」と納得していた。

その後も、遊びで着用するたびに切れた部分を直したりテープを貼ったりしていた。

②環境の構成

- ・ 幼児のイメージが実現できるように様々な種類の粘着テープを用意した。
- ・ 保育者は、幼児自身でよりよい方法を見いだせるように、一緒に考え問い掛けた。



③保育者の意図と若手保育者の気づき

○保育者の意図

- 幅や伸縮性の異なる様々な種類のテープを用意しておくことで、これまでの経験を生かして何とか自分たちで作り上げてほしい。
- 伸びるテープを使ったら着やすかったことを今体験している。さらに、テープのない服の布の箇所は伸びることも知っている。ぐるぐる巻くなど自分たちで考えを出しているので、たとうまくいかなくても、問い掛けるだけにとどめて、幼児が過去の体験から解決策を見いだせるか様子を見てみよう。

○若手保育者の気づき

- 幼児が「できない」とあきらめそうになったとき、私ならすぐにできる方法を教え、困っていたら手伝ってあげたいと思う。しかし、つまずいても保育者が幼児の過去の体験を把握し、幼児を信じて支え、幼児からの考えを待つ姿勢がとても大切だと思った。

④ワンポイントレッスン

Q: 幼児は、うまくいかなくてもそれを乗り越えてイメージを実現しようと気持ちを切り替えて取り組むことができたのはなぜでしょう。

A: 保育者の問い掛けにより、幼児が「できない」から、「できない原因を考えること」に意識が向き、その原因を声に出して言うことで、他の幼児も考えを共有し、その解決に向くことができた。

⑤小学校教員の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ

- 子供たちが様々な思考していることが分かった。すぐに解決策を提案するのではなく、側で見守り、子供たちの思いを汲み取り問題提起をするなど、子供自身で解決できるような関わりが大切だと思った。

2-2 その他提出いただいた事例

調査研究の期間等の都合上、いただいた事例の全てについて、本会議で検討し整理することは困難であったが、保育の充実に向けて参考となることから、掲載をすることとした。

■事例一覧■

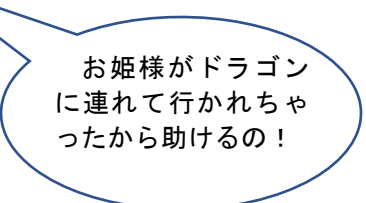
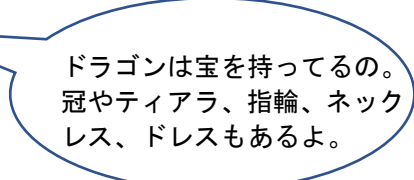
	名称	年齢 実施時期	掲載 頁
1	探検隊の誕生！ －様々な遊びでイメージを広げ幼児が主体的に楽しむために－	4歳児 5月	38
2	トンポって目が2つあるんで！ －生き物の不思議に興味関心を深める中で命に向き合う－	4歳児 8月	42
3	友達とドールハウスで遊びたい！ －子どもが自分達で遊びを進めていくようにする保育者の関わり－	4・5歳児 1月	46
4	うわっ、ひっかかっちゃった・・・ どうしよう？ －自分自身で試行錯誤する姿を見守ることの大切さ－	5歳児 5月	49
5	あじさいの花の数を数えてみよう －身近なものを使って数への興味関心を高める保育の工夫－	5歳児 6月	52
6	どうしたら玉入れで勝てるかな？ －挑戦する意欲を持続させるためのかかわり－	5歳児 10月	56
7	クラスで“おまつり”をテーマに作品作りをしよう！ －同じ目的に向かって試行錯誤する姿を見守るにあたって－	5歳児 10月	59
8	かげはおもしろい！きれい！ －子どもの興味・関心をつなげ、深めることの大切さ－	5歳児 12～1月	63
9	恐竜出現！！～恐竜の種から透明恐竜へ～ －保育士や友達と心を通わせる体験を楽しむ－	5歳児 1月	66
10	『ありがとう』の気持ちを伝えたい －ごっこ遊びだけでなく、お手紙を実際に出すことで、日々の幼児の関心を成長につなげる－	5歳児 1月	70

(1)事例1 「探検隊の誕生！」(4歳児 5月)

—様々な遊びでイメージを広げ幼児が主体的に楽しむために—

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

5月上旬、幼稚園の周りや園外に「何か生き物いるかな?」「いいものあるかな?」と繰り返し出掛ける中で、子ども達から自然と「探検」という言葉が出てきました。中でも、アシナガバチの巣を発見したことを園長先生に伝えたことで、感謝されたり褒められたりしたことが自信に繋がり、すぐにクラスみんながイメージを共有して「探検隊」が誕生しました。



○遊びの様子

大きな蜂の巣を見つけると同時に先生を置いてあつという間に逃げた探検隊。置いていかれて悲しかったことを伝えると、「喧嘩しない」「元気に行く」「話をしっかり聞く」「押さない」「迷子にならない」「離れない」「仲間を大事にする」といった思いが出てきて、探検隊の約束ができました。

また、童謡の「さんぼ」や園歌を歌いながら探検していたら、遊びの中でも鼻歌が聞こえるようになりました。「探検隊の歌ができそう！」と子ども達の言葉を拾っては問い、一緒に考え、遂にこあら組探検隊の歌が完成しました。

友達の遊びに興味や関心を持ち、真似をしたり一緒に遊んだりする中で、更にイメージを共有していきます。また、言葉で思いや考えを話し、友達の考えを受け入れ、遊びを繰り返す中で新しい発想が生まれて遊びが展開していきます。探検用の双眼鏡を作成する時も、A児「僕も作りたい！こうやるの？」B児「そうだよ！後は、好きな色の紐をつけるよ」といったように声を掛け合っています。

5月中旬、色水作りも、思いを出す中で探検の要素が表れています。年長さんに紙テープで作る色水の作り方を教えてもらい、園児たちが紙テープの量を調整したり、窓際に置くと光が当たって綺麗であるのに気づき、C児「ここに置くと、綺麗に見えるよ。宝石みたい！宝石ジュースだ！」D児「わあ、いいね！並べていこう！」と、あつという間に、僕も！私も！と、作り出し、たくさんの宝石ジュースを作って窓際に置いています。

全員居る場で、一人一人から出てきたイメージや思いを話していくと、その場でも探検に対する様々なイメージがたくさん出てきました。教師がオウム返しで言ったり、問い掛けたりすると、どんどんイメージがクラス皆で共有されていきました。(対話)

教師の問い掛けに対し、「ドラゴンや恐竜と会ったら戦うんだよ」「勝ったらメダルがもらえるんだよ」等と豊かな感性で答えています。

戦う！勝ちたいそのためには どうしたら？ の問い掛けには、たくさん動く！（遊ぶ・体力作り）、苦手な野菜も食べる！と子ども達から対策が出てきました。

この意欲、気持ちを活かして、いろいろな体の動きをしたり、配膳された給食の完食を目指したりが、楽しくできるように、環境を準備し支えていく工夫をしています。

②環境の構成

- ・幼児の探検隊のイメージを聞き、必要な物を形にして楽しめるように、様々な教材や使えるような見本等を準備しておく。(物的)
- ・個々の幼児から出てきた思いを受け止めてクラスで共有したり、教師のアイデアも話しながら言葉を投げ掛けてみんなで話し合ったりして、一緒に遊びを展開していく。(人的)



③保育者の意図と若手保育者の気づき

○保育者の意図

- 「探検隊」のイメージやなりきりごっこ遊びを通して、自分たちの課題解決に向けての意欲や自信に繋げていきたい。
- 製作が苦手な幼児が、探検隊を楽しみ、自ら必要な物を考えて作る姿が表れた。
- 共通のイメージをもち、いろいろな友達との関りが深まった。
- 探検隊になって探検することで、身の回りの様々な物やことを見つける心、五感を働かせる力に繋がった。
- 遊びだけでなく、生活面でも意欲的に「自分のことは自分でやろう」「苦手な野菜も食べよう」と意識をもち、取り組む姿が増えた。

○若手保育者の気づき

- 日々の保育の中で、幼児の発見や気づきを逃さず受け止め、クラス皆で対話を重ねて共有したり遊びが広がる環境（十分な場や物）を整えたりすることで、幼児が主体的に遊びに関わり自分たちで遊びを深めていく姿に繋がっていると感じた。
- 「探検隊」になりきり、自然観察や製作遊び、表現遊びなど様々な遊びでイメージを広げて楽しむことで「自然との関わり・生命尊重」「豊かな感性と表現」「協同性」「思考力の芽生え」など10の姿に繋がる力を総合的に育み、一人一人の自信や学びに向かう力へと繋がっていることが分かった。
- 自分の課題として常に遊びの方向性や時期にとらわれてしまいがちであるが、幼児理解を深めると共に固定概念をなくし、柔軟性をもって保育を進めることが大切だと感じた。

④ワンポイントレッスン

Q：遊びの方向性や時期にとらわれがちになってしまうのですが。

A：幼児の遊びに対する思いや何に面白さを感じているのかを見取することで、教師に必要な援助や環境構成が見えてきます。保育者として、遊びのねらいを押さえ、育てたい力をもつことは前提ですが、それらを達成するための遊びの展開は幼児の思いに沿って進めていくことが大切です。季節ならではの遊びもありますが、時期にとらわれず幼児の興味を柔軟に受け止めていくことで、経験や遊びの幅が広がっていきます。

⑤小学校教員の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ

- ・「なぜ？どうして？」と子どもが考えたときに、すぐに調べられる、試せる環境の中での学びが土台となり、小学校の学習に繋がっていると感じた。疑問を大切にしたい授業展開をしていきたい。
- ・10の姿は子どもたちの学びを支える意欲に一番直結しているものだと思う。小学校でも、子どもに与える課題が子どもにとって自分事になっているものでなければ学びに向かう力は弱くなってしまいます。幼稚園での豊かな体験をもとに、学びにつながる課題を子どもに与えていきたい。
- ・子どもたちは遊びの中で何か一つの力をつけるのではなく、複雑に絡み合い、スパイラルのように10の姿を高めていくのだと感じた。大切なのはその瞬間を捉え、子どもたちにどう教師がかかわっていくかである。

(2)事例2 「トンボって目が2つあるんで！」(4歳児 8月)

ー生き物の不思議に興味関心を深める中で命に向き合うー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

2学期が始まって2日目の年中組。部屋にトンボが入ってきて大喜び。観察するうちに飼育したくなり、必要なものを調べ始めた。トンボの体の一部が取れてしまう出来事を目の当たりにし、子どもたちのトンボの生体への興味関心はさらに強くなり、生き物の「命」に向き合う子どもたちの心が伝わる。



○遊びの様子

部屋に入ってきたトンボを飼育ケースに入れて観察した。“何という種類のトンボなのか” “トンボはどうやって飼うことができるのか” “餌ってなんだろう？”と疑問に感じることを自分の図鑑で調べ「トンボの止まるための木を探そう！」「水あげないと！」とトンボの家を作ること一生懸命になっている。

S児はすぐに「先生！こんな木がいるんだって！」と図鑑のイラストを見せてくれた。その言葉を聞いた虫に詳しいK児は「トンボが止まったりするところがあるってことや」と教えてくれ、周りで聞いていたS児、K児、M児も「そっか」「じゃあ、木がないか探してみよう！」と園庭を探し回る。しかしトンボが止まってくれそうな長くてしなやかな木が見つからない。「運転手さんの部屋の近くにないか聞いてみる？」と声を掛けると、張り切って「トンボのお家に入れる木、ありますか？」と尋ね、丁度よさそうな木を貰い、早速飼育ケースに入れた。何もない飼育ケースの中で少し弱りかけていたトンボが、木を入れた後どうなるかみんな集中して見ていると木に止まり、子どもたちは大喜びだった。その後、H児、K児、S児は「水をあげんと！」と水を飼育ケースに入れてあげようと考えた。とにかく早く水をあげたいH児は500mlのペットボトルいっぱいに入水を入れてきて、虫かごに入れようとしたが入らない。K児とS児はペットボトルの底の部分だけを他の教師に切ってもらい「このくらいやったらいいかも」と水を入れたペットボトルの底部分を入れてみた。しば

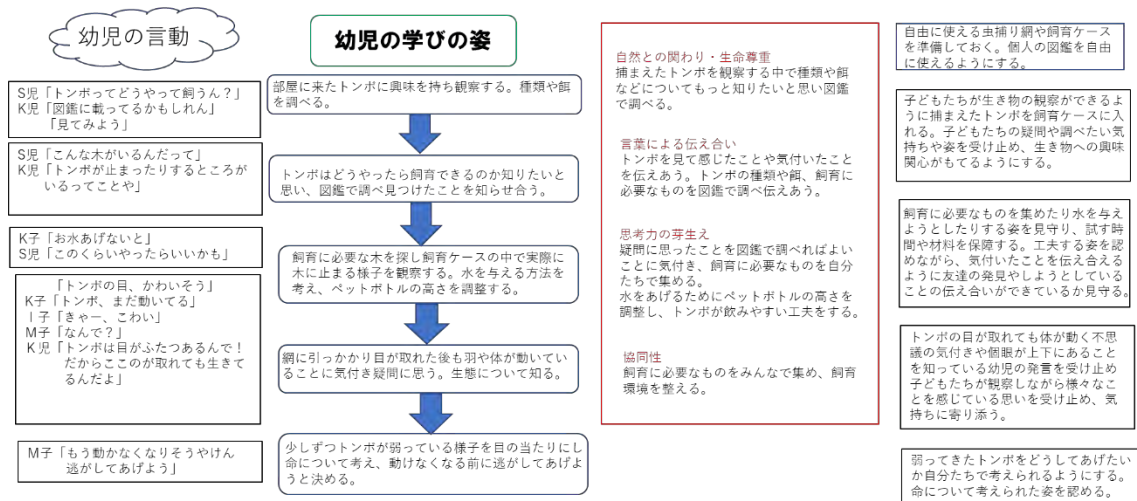
らく“水飲むかな？”と観察していたが、なかなか飲まない。トンボが水を飲む姿を見てみたい子どもたちは降園前まで何度も見に行っては「まだ飲んでいない」と少し残念そうにしていた。

飼うための準備をしていると、トンボがもう1匹部屋に入ってきた。捕まえたがトンボが網にしっかりとしがみついていたことで網から出した時に目の部分が体から取れてしまった。「Kくん、ごめん！トンボさんの目が取れちゃった…」と伝え、取れてしまった体と羽の部分だけを渡そうとすると、近くにいたK子、I子、M子がトンボの特徴的な大きな目の部分が取れてしまったにもかかわらず、羽や体の部分は動いていることに気付いた。初めは「やだー！怖い」「なんで？」と少し怖がっていた3人。そんな中、虫に詳しいK児だけはじっくりと見て「トンボは目が2つあるんで！だからここのが取れても生きてるんだよ！」と教えてくれた。保育者が「目はこの大きい2つだけじゃなくて、他の所にも付いてるってこと？」と聞くと「うん。そうだよ！ここら辺にあるはず！」とトンボを指さして教えてくれ「え！そうなん？」「Kくん、そんなん知ってるのすごい！」と言いながらみんなも興味を持ち、トンボを触ったりじっくり観察したりした。その後、少しずつ弱ってきていることを感じ「もう動かなくなりそうやけん、外に逃がしてあげよう」とM子の一言でそっと逃がしてあげた。

②環境の構成

- ・子どもたちがいつでも虫捕りができるように保育者は網や飼育ケースを準備している。捕まえたトンボを飼育ケースに入れ、子どもたちが間近で見て観察できるようにした。
- ・日頃から個人のミニ図鑑を遊びの中で自由に使えるようにし、興味をもった動植物についてすぐに調べられるようにしている。
- ・園での生き物との出会いを通して興味関心を深めるとともに、命あるものを飼育することについては子どもたちと考えられるようにしている。

トンボって目が2つあるんで！（4歳児8月）



③保育者の意図と若手保育者の気づき

○保育者の意図

- ・トンボにも命があることを知らせた上で、飼うのか逃がすのかをみんなで考えられるようにしよう。
- ・飼育するために必要なことを自分たちで調べてほしい願いから自分たちで調べたい思いが持てるようにした。疑問に思ったことに対してすぐ答えを知らせるのではなく、子どもたち自身で調べたり試したりしてほしい。
- ・自分たちだけで飼育に必要なものを見つけ出せなかった際には、気づきを与え気付けるようにし、自分たちで見つけられた喜びを感じてほしい。止まり木にトンボが止まるか観察できる時間を保障しよう。
- ・トンボに水をあげようとペットボトルをそのまま飼育ケースに入れようとする姿や、底部分だけを切って低くしたらトンボが水を飲むのにちょうどいいのではないかと友達と工夫する姿が見られた。それぞれの子どもたちの考えや試したい思いを受け止めながら、見守ることにした。
- ・2匹目のトンボは目が網に引っ掛かり目が取れても動く様子に強い興味関心を持った。トンボの動きや弱る様子、命が短いかもしれないならどうしてあげるべきかを子どもたち自身が考えて答えを出せるようにしよう。生き物を捕まえて満足ではなく、その後どうするべきか命についてよく考えてみてほしい。

○若手保育者の気づき

- ・子どもたちが生き物への興味関心を持った時に、いつでも捕まえたり観察したりできる環境が整えられていて、子どもたちの気持ちに寄り添った環境が良い。
- ・子どもがトンボを見つけてきた時に、子どもたちに生態や飼育の仕方を先走って知らせてしまっていた。一緒に観察を楽しみ、子どもたちの様子や言葉を見取り援助していく保育者の姿がとても良いと思った。

- ・調べたいことを大人に聞くのではなく、図鑑で調べている姿に子どもたちの意欲の高まりを感じた。普段から保育者と一緒に調べる経験があったからなのだろうか。すべて保育者が教えるのではなく、自分たちで調べ、考えられるような言葉かけが良いと思った。
- ・子どもたちが木を見つけられず困っている時に気付きを与えられる情報をもつことが大切だと感じた。自分自身が園にどのような環境があり、どんなことに使えそうか常に考え、引き出しとして持っておくべきだと思った。
- ・ただ虫に触れるだけでなく、命の大切さや自分たちと体の仕組みのどこが違うのか目はどこにあるのか、子どもたちの気付きに耳を傾けられるようにしたいと感じた。一つの命としての大切さを考えられる時間の余裕を持つことが必要だと感じた。普段の保育に追われるが、子どもたちの思いや気付きに目を向けられるように保育者自身も余裕を持って保育をしたい。
- ・弱りかけている虫を見ると「かわいそうだから外に逃がしてあげよう」と言いがちだが、子どもたちの「家を作って育てたい」という気持ちを大切に飼育観察をしていくことができ、子ども発信で飼育しているトンボをどうしたらいいのか気付けるように取り組むことができおり良いと感じた。
- ・飼育途中にトンボが弱っていることに気付いたら、自分だったら「どうする？」と投げかけてしまうと思う。子どもが命の大切さを知ることができるよう、子どもの気付きと発信を大切に、その声から飼育を続けるか逃がすかをみんなで考えることが大事だと感じた。

④ワンポイントレッスン

Q：幼児の興味関心を広げ、命あるものとして生き物への関わりを考えることができたのはなぜでしょうか？

A：偶然部屋に入ってきたトンボとの出会いを通じて、ただ捕まえて終わりではなく、生き物への興味関心が広がるような声掛けや観察や飼育ができる環境の構成をしています。子どものつぶやきに丁寧に耳を傾け、捕まえた後の意識が途切れることなく関心をさらに深め、自分たちと同じ命のある生き物であることに気付き、愛情をもって向き合えるように保育者のその後の関わり方や継続した見守りが重要です。保育者が先に答えを出したり簡単に主導したりせずに子どもたち自身が生き物を通して様々な感情を味わい、命ある存在としてどう関わるべきかを考え、子どもたち同士で答えを導き出していくことが大切だと思います。

(3)事例3 「友達とドールハウスで遊びたい！」(4・5歳児 1月)

ー子どもが自分達で遊びを進めていくようにする保育者の関わりー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

4月当初、「大きなお家を作りたい」という子どもの思いから保育者が大きな段ボール箱を準備したことで子ども達の再現遊びが始まった。段ボールにはドアや窓を開け、その中に入って子ども同士がやり取りを楽しむうちに電話やテレビを作るようになった。そして箱から出て、洗濯機やクーラー・お風呂やトイレなど家庭にあるものを次々に作って遊ぶようになり、より本物らしく再現したいという子どもの思いが強くなっていった。

9月頃よりドールハウスに興味をもち、初めは自分の家を再現して遊んでいたが最近では想像して作ったりすることが面白くなってきている。保育者は子どもの思いに沿って一緒に考えたりイメージが広がるような言葉を掛けたりして、子どもの主体性を大事にしながらかわり環境構成を工夫してきた。このように身近な素材を使って日常的に作って遊ぶ積み重ねから用具を扱う技術も上達し、イメージしたものをすぐ作ってみようとする意欲にも繋がってきている。

子ども達は、身近な箱や紙などの素材を使ってそれぞれにドールハウスを作っていた。紙に描いた人形を動かしながらなりきって遊び、必要なものを友達と意見を出し合って協力して創造していく楽しさを感じている。



A児が畑で野菜を育て収穫した楽しい経験を再現。紙をマーカー（茶）で塗って畑を作り、色画用紙を切って大根やトマト・きゅうりなど思いついた野菜を次々に作っていた。隣で自分のドールハウスで遊んでいたB児がA児に「私も大根いる」と言って頼んでいる場面。



「あっ、牛に角ある…」C児は角がないと思い込んでいたが、D児と一緒に図鑑を見ることで角がある牛とない牛（牛同士傷つけるので切っている）といることを知る。D児も自分が見た記憶が間違っていなかったことに納得した場面。



C児が牛を描き乳や出てくるミルクも描いて、二人で人形を動かして乳しぼりをしようとしている場面。



乳しぼりに必要なバケツも作って緑の紙の牧場の上で友達と一緒に乳しぼりをして遊んでいる場面。

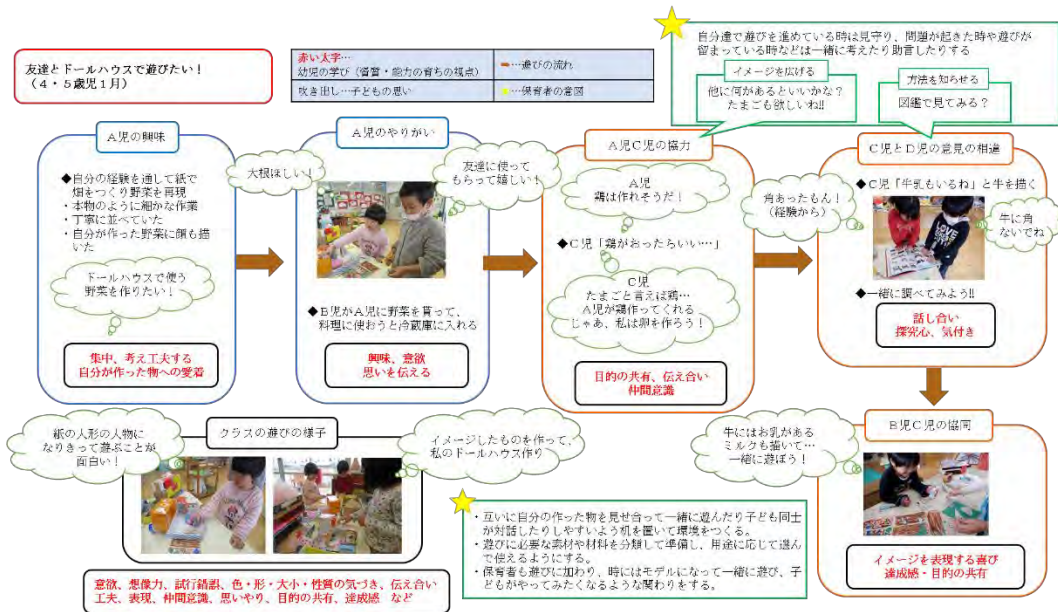
ドールハウスの箱の中にはベッドやキッチン・冷蔵庫など生活に必要なものが細かに作られ、子ども達は紙に描いた人形を動かしながら遊んでいた。食べ物が必要になると空いた場所に畑をつくり、野菜や果物を育てている様子を再現していた。

A児が畑で色画用紙を切って野菜を作っているとB児が人形を動かしながら「私も大根いる」と言った。A児ははにかんだ笑顔を見せて作った大根を渡し、B児は「大根スープを作ろう」と自分の冷蔵庫に入れた。B児の畑は野菜でいっぱいになった。保育者が「他に何かあるといいかな？たまごもほしいね」と呟くと、傍にいたC児が「にわとりがおつたらいいがやない？」と閃いたように答えた。A児は「ぼくが、にわとりつくる」と言ってすぐ描き始め、C児は画用紙を小さく丸く切って「これ、たまごね」と渡した。

D児も加わりC児と一緒に目玉焼きを作って遊んでいた時、C児が「牛乳もいるね」と牛を描き始めた。C児は「角ないでね」と問うと、D児は「あるで、見たもん」とはっきり答えた。C児は思い出したように牛乳パックを取り出して来て、「ほら、ない」と牛乳パックに描かれた牛をD児に見せた。それでもD児は「でも、あったもん。私見たのに…」と納得できない様子。保育者が「図鑑で見てみる？」と声を掛けると二人は調べに行き、角のある牛の写真を見て「角があるのもおるがや。どっちにする？」と話し合っ角のある牛を描いた。牛には乳と出てくるミルクも描き加え、バケツも作って乳しぼりをする真似をして遊んでいた。

②環境の構成

- ・遊びに必要な素材や材料（色画用紙や厚さの違う紙など）を分類して準備し、用途に応じて選んで使えるようにしている。
- ・保育者は、互いに思いを出し合う子ども同士の関わりを大事にしながらイメージしたものを実現できるようにしている。



③保育者の意図と若手保育者の気づき

○保育者の意図

- ・自分達で思いを出し合いながら遊びを進めているときは見守り、問題が起きたときなどはそれぞれの思いを受け止めた上で一緒に考えたり助言したりしている。
- ・子どもの遊びの様子を見ながら、遊びが留まっているときなどにはさりげなくイメージが広がるような言葉を掛けたり活動に加わったりしている。
- ・互いに自分の作った物を見合い刺激し合って、一緒に遊んだり子ども同士が対話したりしやすいように机を囲んで遊ぶ環境づくりをしている。

○若手保育者の気づき

- ・子どもが卵や牛乳が欲しいと言って鶏や牛を作り始めた。予想外であるが、子どもの考えや行動を肯定的に捉えて子どもの興味ややってみようという思いに寄り添っていた。
- ・子どもの疑問にすぐ答えそうになるが、自分達で考えたり調べたりして気づいていけるようにしていた。

④ワンポイントレッスン

Q：子ども達で遊びを進めていくことが難しいと感じた時どうすればいいでしょう？

A：保育者が遊びに加わり共感したり認めたりする中で、友達の表現のよさを発信し互いの“素敵”に気付いていけるようにする。また、時には保育者もモデルになって遊びのきっかけをつくる。

⑤小学校教員の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ

- ・子どもの興味や好奇心を大切に、じっくりと子どもと向き合う保育者の姿勢に感銘を受けた。また、子ども同士を意図的に関わり合わせられるような配慮が見られた。大人が、子どもと共に考え、悩み、行動することが、子どもにとって安心できる場につながっていることを感じた。小学校入学後も、保育園での学びをリセットさせることなく、主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことができるよう取り組んでいきたい。

(4)事例4 「うわっ、ひっかかっちゃった… どうしよう？」(5歳児 5月)

—自分自身で試行錯誤する姿を見守ることの大切さ—

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

放り投げた帽子が天井にひっかかってしまった。自分なりに取ろうとしていたところに友だちも加わり、試行錯誤を繰り返しながらいろいろな気づきを得、成功することができた。



ひっかかっちゃった



長い剣を作ろう



どっちが大きい？



届かないなあ



押さえておくね



先っぽを曲げて



とれた！

○遊びの様子

登園してきたA児が、通園帽子を放り投げて遊んでいたところ、偶然天井にひっかかってしまった。

園庭で木にボールがひっかかったときなどに、虫取り網でとっている経験から、保育室にある広告紙で細長い剣を作れば届くのではないかと思いつく。

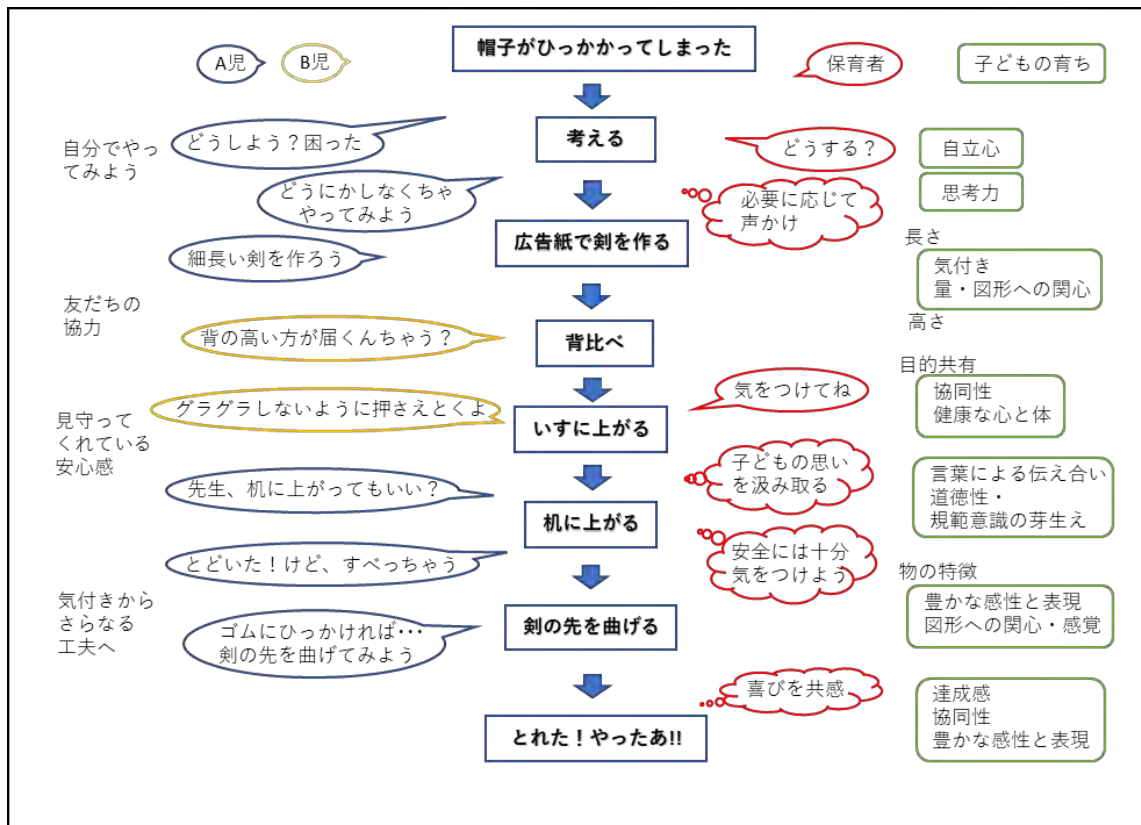
しかし広告紙1枚分では届かず、いすの上に上がってみたりするが届かない。(保育者がその場にいないければ)机に上がろうとするのだろうが、規範意識が働く。

B児も一緒になって、「剣をつなげてもっと長くしたら?」「背の高い子の方が届くかも」と様々な方法を考えては試しているのを見てC児も加わり、上手いく方法を見つけ出そうとしていた。

どうにか届くようになってきたものの、すべて上手くいかない。よく見ているうちに帽子のゴムが垂れていることに気付き、剣の先を曲げてみることを思い付き、とることができた。

②環境の構成

- ・自分たちで考え、工夫しながら解決策を見つけていこうとする姿が見られたので、そばで様子を見守ることにした。
- ・安全面に配慮する。



③保育者の意図と若手保育者の気付き

○保育者の意図

- ・困ったことが起きたときに自分でどうすれば良いか考えられることが大切だと思うので、保育者は、「あーあ、どうする?」という言葉掛けだけにし、A児がどのように行動するか見守ることにした。「取ってください」と伝えに来るかと思ったが、自分でどうにか取る方法を考え始め、それを見ていた周りの友だちがどう関わるか、協力するかをしばらく見守ることにした。

- ・楽しみながら何度も試している姿に成長を感じると共に、楽しいだけではなく、帽子を飛ばしたらどうなるかなど、今後考えられるようになって欲しいという気持ちがあった。
- ・普段は上がってはいけない机の上で天井の帽子に集中していることから、落ちたり周りの子にぶつかったりしないよう、安全面への配慮、見守りをした。

○若手保育者の気付き

- ・一度子どもたちに「どうする？」と聞いてみるが、保育者が解決策を提案したり、手伝ってしまいそう。そうすると、背の高い方がとろうと考えたり、剣の先をフックのように曲げるなどの考えにまでは至らなかつただろう。3人で考えて帽子をとることができたことで達成感を味わうことができたと思う。

④ワンポイントレッスン

Q：最後まであきらめずに、主体的に活動できたのはなぜでしょう。

A：この行為を保育者が温かく見守ってくれている、認めてくれているという安心感と、十分な時間の補償があった。また、それを周りの子たちも感じ取り一緒に協力したり、応援したりすることが、より励みになったのだと思う。

⑤小学校教員の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ

- ・子どもたちは日々の生活の中で、規範意識や協同性、思考力、数量や文字への関心を高めている。すぐに解決策を提案するのではなく、十分に考え、やってみる時間を保障することで、主体的に取り組み、考えることの楽しさや達成感につながるのではないかと思う。
- ・また、クラスみんなで通園帽子の扱い方などについて話し合ったことにより、やってしまったことへの受け止め方も変わり、次の行動へと繋げることができたと考える。

(5)事例5 「あじさいの花の数を数えてみよう」(5歳児 6月)

ー身近なものを使って数への興味関心を高める保育の工夫ー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

クラスに飾ってあるあじさいを観察する中で、小さな花(がく)の集合体であることに興味をもち「いくつの花でできているのかなあ?」と声上がる。数への関心も高まっていたため、クラスの子どもたちと実際に数えてみることにした。



○遊びの様子

クラスに飾ってあるあじさいを観察する中で、小さな花(がく)の集合体であることに興味をもち、A児から「たくさんの花が集まってる」と声上がる。

数への関心も高まっていたため、子どもたちと実際に数えてみることにした。

今までは見るだけだったが、目視だけでは子どもたちも花が多すぎてうまく数えられない。実際に花をちぎり、数えてはどうかと教師が提案する。「お花ちぎったらかわいそう」と声上がり、最初は花をちぎることに抵抗を示す子どももいたが、ちぎった花を大事にして、いくつあるかみんなで数えてみようと言ったことで納得していた。一つ一つ紙に貼って数を数えることで、たくさんの花が集まってひとつになっていることを知ることができた(数量・図形・文字等への興味関心・感覚)。

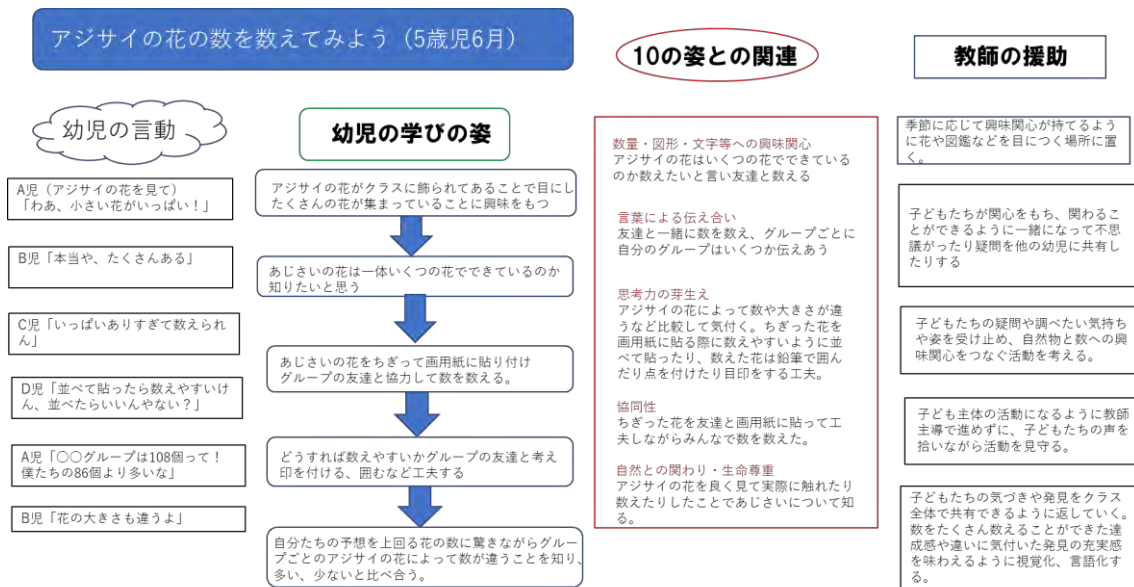
数が分かると、花がいくつあったかB児は数字を書いたり、他のグループに伝えて数を比べたりすることがあった。また、数だけではなく、A児は花の大きさが一つ一つ違う事にも気づき、発見を友達や教師に共有する姿が見られた。(言葉による伝えあい)

この経験をした後にグループであじさいを折り紙で折る活動を行なった(協同性)。折り紙で折ったあじさいの花をA児、B児、C児は集合させて、一つのあじさいを作っていた。経験したことが子どもたちの遊びに生かされていることを感じた。見るだけでは分らない

かったことが、実際に触れる体験をしてみても学ぶことができ、本物を見たり体験したりすることの大切さを改めて感じた。(自然との関わり・生命尊重)

②環境の構成

- ・季節のものに興味関心を持ってほしいと思い、日頃から子どもたちが登園して目に入りやすい場所に季節の植物や生き物を置くようにしている。6月にはあじさいの花に興味を持てるように園の玄関や各クラスに飾っていた。あじさいは種類によって形も様々なため、毎年面白さを感じて子どもたちが観察をしている。今年も「ヤマアジサイ」「カシワバアジサイ」「ガクアジサイ」「スミダノハナビ」「オタフクアジサイ」など花の形や成り立ちが違うものを準備し、子どもたちが観察できるようにしている。
- ・興味を持った時に調べたり、そのことについて知ったりできるように関連した絵本や図鑑を手にとれるように隣に置いたりしている。
- ・保育者は子どもたちのつぶやきや発言に耳を傾け、子どもたちの興味関心に応じた保育をするように、きっかけになる出来事は何かを意識している。また、気づいたことや考えたことを互いに伝え合ってもらいたいと思い、朝や帰りの集まりでも子どもたちが発言できる場を日ごろから大切にしている。あじさいに興味を持った子どもの発言を保育に取り入れてクラスのみんなで共有できるようにしたいと思った。



③保育者の意図と若手保育者の気づき

○保育者の意図

- ・あじさいの花の数に興味をもつ幼児の姿から、幼児でもたくさんの花を数えられる経験をさせてあげたいと思い、数を数えやすい環境の構成や活動の仕方を考えた。
- ・花瓶のあじさいを指をさしながら数えても、なかなか数えきれない。白い紙にちぎって並べることで目に見えて花の数が数えやすく、他グループとの比較もしやすいのではないかと考えた。

- ・そこで白い画用紙を準備し、子どもたちの数えたいという思いを支えられるようにした。ちぎったあじさいを並べてテープで貼るようにすると子どもたちの数を数えたい気持ちが途切れることなく数への興味関心がさらに高まっていた。
- ・クラスでも園庭でも花を大事にするように子どもたちに伝えていたため、子どもたちも最初はちぎることに「かわいそう」という子もいた。植物を大事にしようとする気持ちが育っていることを感じた。教師自身もあじさいの花を実際にちぎって教材として使うか迷う気持ちもあったが、様々な面から季節の植物に興味関心を深めて親しんでほしい願いから教材としてあじさいをより知る活動へと展開することにした。

○若手保育者の気付き

- ・朝の集まりであじさいの花を季節の花として紹介はしていたが、子どもの目線に立って準備をして、常に置いておくことが子どもの興味関心につながるのだと感じたので保育に生かしたい。
- ・子どもたち同様、お花をちぎることに自分も抵抗があったが教材として使い、子どもたちが実際に触れ言葉で伝え合うことにも意味があると感じた。また、ひとつの植物を使って花の特徴を知ることによって更に子どもたちが植物に興味を持ち、植物を大切にできる子どもたちに育っていけるのではないかと感じた。
- ・ひとつの花だけでなく、グループごとにあじさいの花を準備し、子どもたちが実際に触れて使用する経験ができたため子どもたちにとって大きな学びになっただろうと感じた。
- ・あじさいの花の数え方として、まずそのままのあじさいを見て数えてみる。しかし難しさを感じて花弁をちぎって数えてみると二つの方法で試してみて、子どもたちの気付きにつながっていた。
- ・実際にちぎった花弁を紙に貼ることで「こんなにあったんだ」と視覚を通して感じられたと思う。
- ・花をちぎることに抵抗があったが、子どもたちの気付きにつなげる一つの方法として、また教材としての可能性を感じたので取り入れていきたい。
- ・実際のあじさいを見るだけでなく、グループの友達と折り紙であじさいを作るという活動につなげ、その時だけで終わらない保育者の工夫がまだ自分にはない部分だと感じた。

④ワンポイントレッスン

Q：この事例で幼児が自分たちで数を確かめたり比べたりするなど、探求したいと思ったのは保育者のどのような援助や環境の構成があったからでしょうか。

- A：・実際に触れながら疑問を確かめることによって幼児の興味関心、より深く知りたいと思う気持ちが掻き立てられる。自然との関わりを通して一輪一輪の花自体の個性や種類によって色合いや花の大きさなどの美しさや不思議さに気付くことができた。対象にどのように関わってほしいのか、何に気付き感性や感覚を育んでほしいのか、保育者は子どもの育ちに願いをもち保育することが重要である。
- ・幼児期は大人が思うよりずっと日常生活体験の中で数量の感覚や思考力が育っている。身近なものに対して知りたい欲求がある時には夢中になって数えたり比べたりする。子どもたちが観察したり比べたりしながら多くの発見ができるように、園生

活の中で数量や図形への感覚を養えるような環境を整え、保育を工夫することが大切である。

- ・ちぎったあじさいの花をグループによって様々な方法で数を数えていた。「花の横に数字を書く」「花を鉛筆で丸く囲みながら数える」「花の横に鉛筆で点をつけながら数えた目印にして数える」など、自分たちと他のグループでは「良いと思う数え方」が同じではないが、他のグループの方法も数えやすいことなど他の考えの良さにも気づくことができた。考えたことや発見したことを伝え合い、互いに表現できるように、機会を逃さず日頃から保育で意識することが幼児の主体的な学びを保障する上で重要である。

(6)事例6 「どうしたら玉入れで勝てるかな？」(5歳児 10月)

ー挑戦する意欲を持続させるためのかかわりー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

春のミニ運動会の玉入れで、練習を含め同学年の他学級に一度も勝つことができず、秋の運動会の玉入れでも最初は勝てなかった。諦めかけていた幼児たちが、「どうしたら勝てるか」自分たちで考え、練習をするようになり勝つことができた。



保育室の入り口にかごをぶらさげ、
いつでも玉入れができるようにした。

○遊びの様子

春のミニ運動会に続き、秋の運動会でも「秋の戦い」として玉入れを行うことにした。春は練習時から一度も勝つことができず、悔しい思いをしたので「よし！今度は負けたくない！」とやる気いっぱい最初勝負に臨んだ。しかし、大差で負けてしまう結果となった。今回も負けたことで「やっぱりゆり組(同学年他学級)には勝てない。」と諦めの雰囲気となった。2度目の練習では競技中に「どうせ勝てない。」「今日もゆり組が勝つんだ。」という言葉が聞かれ、消極的な姿が見られた。その後も1日の予定で「たまいれ」とあると「今日も絶対負けるよね。」と言うほどであった。その言葉を聞き教師が「そうだね。絶対負けると思って玉入れをしたら負けるよね。」「ゆり組さんは、絶対勝つんだって言ってたよ。」と言うと一転、「負けるとか言ったらだめだよ。」「また部屋でも練習しようや。」と再び意欲的な姿になった。春は底を開けた段ボールを壁面に貼り、バスケットゴールのような物を作って、保育室でも練習しており、また同じ物がほしいと言ってきた。負けた前回と同じ方法でよいのか、どのようにすれば勝てるのかということ投げかけ、自分たちで練習方法を考える時間をもった。小学生の兄の運動会で玉入れを見たというA児が「強く投げるんじゃなくて、下からやさしく投げればいい。」と発言した。教師が「なるほどね。確かに、すみれ組(本学級)の玉はかごの向こうまで跳ぶことが多いね。」と絵に描き示したところ、下から上に向かって投げられるような練習をしようということになった。保育室を見渡し、どこにどんな物を取り付ければよいか、思い思いに言い合っていた。様子を見守っていると「ここにかごをぶら下げたい。」と意見がまとまったようだった。春は新聞紙の玉だったが今回は

実物の玉を使いたいということで、玉を準備し、幼児のアイデア通り保育室の入り口ドアの上部分にかごを結び付けた。遊びとして自由に玉入れを行えるが、活動の片付け後や降園前などには全員参加し「玉が入った人から支度をする」と幼児たちで決めていた。

その後も負け続けていたが毎日保育室での練習を続け、総練習の日に初めて勝ち、運動会でも勝つことができた。幼児同士声を掛け合いながら大喜びしていた。

②環境の構成

- ・最初から諦めていること、だから楽しくないことを幼児自身が気付けるような声掛けをしている。
- ・今までの経験から幼児が自分たちで方法を考えられるように見守る。
- ・準備から片付けまで、幼児だけで行えるような場の設定にし、やりたい時にすぐにできるようにしている。



③保育者の意図と若手保育者の気付き

○保育者の意図

- ・活動前から「負けるよね。」と言い、負けた後は「やっぱりね。」と言うことで「負けて悔しい気持ち」を避けようとしている雰囲気であった。一生懸命の結果であれば恥ずかしくないことや、悔しい気持ちをもつことは成長の為に必要であることなどを繰り返し伝えることで、幼児の気持ちも少しずつ変わってきたようである。
- ・保育者がすべて準備した中では「先生が言うからやる。」と受け身になるが、自分たちで話し合い、決めた方法で活動すると意欲が増し、積極的に取り組む姿が見られた。

○若手保育者の気付き

- ・玉入れの競技時だけでなく、遊びや生活の場にも玉入れができる環境を準備したことで、幼児の意識が途切れずに持続したと思った。

- ・保育者が具体的な方法を教えたり、完璧な環境をすべて準備したりして活動を引っ張りそうである。幼児が自分で考えられるように、保育者は待つ、見守るというかかわりも必要であると思った。

④ワンポイントレッスン

Q：負け続けていた幼児たちが気持ちを切り替え、意欲をもって最後まで取り組めたのはなぜでしょうか。

A：「負けても仕方がない。」「どうせ勝てない。」という幼児の声を注意するのではなく、あえて共感することで幼児自身が「そんなことない。」と気付けたことがきっかけのように思います。また、負けることに対して保育者が否定的な声掛けをせず、「前回よりよかったこと」を見つけてしっかり伝えていったことも意欲につながったのではないのでしょうか。

(7)事例7 「クラスで“おまつり”をテーマに作品作りをしよう！」(5歳児 10月)

—同じ目的に向かって試行錯誤する姿を見守るにあたって—

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

廃材を使った制作が好きな子どもたち。その中で、みんなで1つのテーマを考えて作品作りをすることにした。“お祭り”というテーマに基づき、どんなものがあるのか話し合いを深めていった。そして、作り上げた作品を11月の作品展で展示することにした。



○遊びの様子

クラスのテーマに基づき、金魚すくいを作ることにした。いきなり作るのではなく、下描きをしてから制作することになった。A児は下描きをしながら「ここはどうしよう…何を使えばいいだろう…」と悩んでいた。側で様子を見ていた教師が「廃材コーナー見に行ってみようか？」と誘い、一緒に見に行き素材を探した。すると、同じ金魚すくいを作ろうとしていたB児が「金魚は色々な色がいてもかわいいと思う!」C児が「金魚をすくうのポイは丸い素材でなくても、段ボールを丸くすればいいんじゃない?」とヒントをくれた。A児は、「そっか、じゃあ、色々なものでかわいいの作る!」と段ボール、コピー用紙の包み紙、ビーズ、折り紙の空き箱等、様々な材料を持ってきた。その後、作っては崩し、作っては崩し、納得いくまで何度も作り直した。絵の具がはじいてしまう紙を見つけて、別の紙に変更したり、ビーズをつけるときはボンドを使ったり、友達にも情報共有しながら作り上げていた。教師は出来上がる過程を見ながら「色々な金魚がいてすくうの楽しそうだね」と声を掛けると、A児は作り方の説明をし始めた。作品がすべて出来上がると、A児は友達の作品を見ながら感想を伝えた。「私の金魚と違うけど、かわいいね! あっ、しっぽがモールでできてる! こんな風にもできるんだ!」と素材にも着目していた。また、「教えてくれてありがとう」とヒントをくれたB児、C児にお礼すると、「みんなの金魚、全部違うけど全部かわいいね! いろんな廃材で作れるって発見しちゃったね!!」と興奮気味に作品を見ながら話をしていた。

②環境の構成

- ・製作したいと考えているものに必要なものを、廃材あそびコーナーから選べるよう多種多様な廃材を揃えておく(牛乳パック、トレー、毛糸、障子紙、ボタン、毛糸等)
- ・自分の作りたいものを友達と共有し、イメージが更に膨らむように下描きをもって発表す

る（友達の作りたいものを見ることによって、ああしてみたい、こういうのもいいかも、とよりよいものが作れると考えた）

- ・異素材を組み合わせるときに必要なと考える接着剤（ガムテープやボンド等）を揃えておく（日ごろ使っているセロテープだけではつかないものもあると子どもたちも知っている）

③保育者の意図と若手保育者の気付き

○保育者の意図

- ・作りたいものを決め、設計図を描くことで、自分なりにイメージして作品作りをすすめてほしい。
- ・作品作りを通して、自分の思いが形になる喜びを味わってほしい。
- ・友達の作品を見たり、思いを聞くことで、友達の良いところをたくさん見つけてほしい。

○若手保育者の気付き

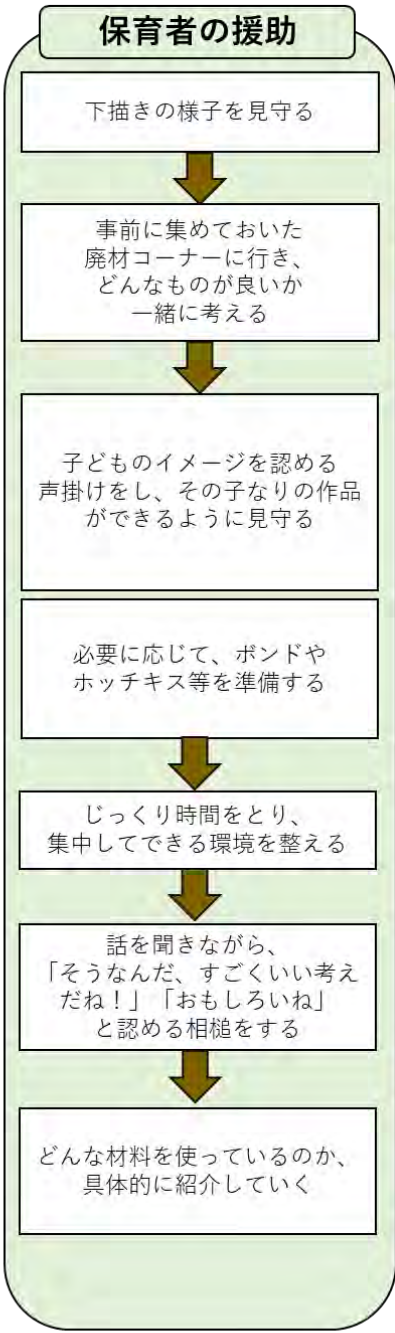
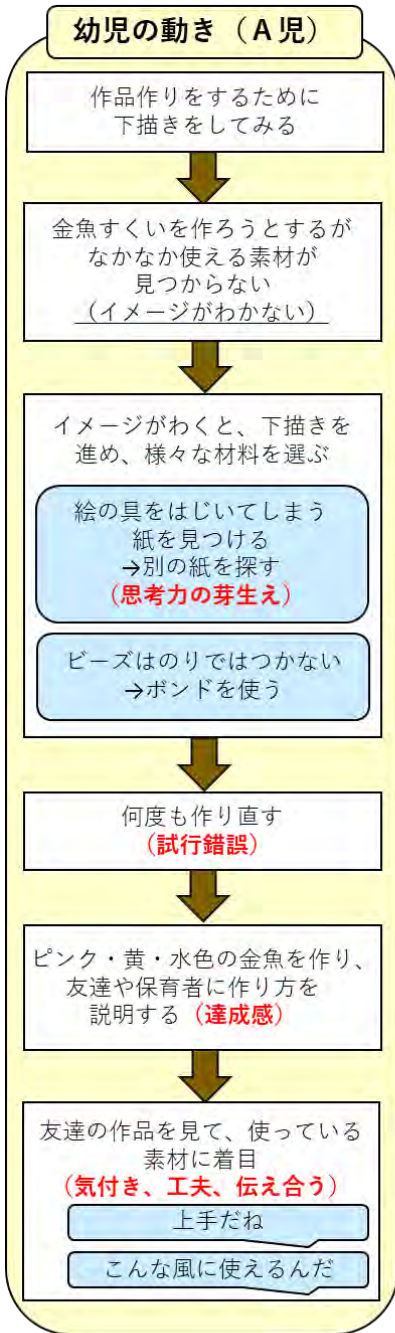
- ・作りたいものをイメージしにくい子に対して、どこまで援助の声掛けをしたら良いか、悩むことがある。同じ作品を作る子どもたちのグループを作ることで、周囲の友達からヒントや自分はこうした、と友達から話を聞くことができていた。保育者としては、色や形の提案、じっくり考えられる時間を作ることで、その子のペースで作品作りをすすめられた。
- ・子どもの主体性を引き出すためには、保育者としてどう声掛けをするか、どのように導くと意欲的に活動に取り組めるのか。

“おまつり”をテーマに作品作りをしよう！（5歳児 10月）

表記について

赤い太文字：幼児の学び（資質・能力の育ちの視点）

➡：遊びの流れ



B児・C児からのヒント

B児
いろいろな色の金魚がいてもかわいい

C児
段ボールを丸く切ってポイを作るのは？

(道徳性・規範意識の芽生え) (協同性)

B児
これ、絵具がきれいにぬれてていいね

C児
目がボタンになっててかわいい！私もそうしようかな？

(発見の喜び)

④ワンポイントレッスン

Q：保育者自身が制作が苦手…。子どもたちへの声掛け・援助はどのようにしたらよいか。

A：まずは、できない…と思う前に自分はどこまでならできののかを考えること。保育者自身が楽しめなければ子どもたちに表現活動の楽しさが伝わらない。上手がすべてではないため、楽しい、わくわくする思いを大切に。「素敵な色だね」「楽しそうな絵だね」と認め、“上手”と褒めるのではなく、子どもが自信を持てるように声掛けすると良いと思う。何かを作ることだけでなく、様々なものをテーマに絵を描くことで子どもたちの生きていく力につながる。

⑤小学校教員の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ

・子どもたちが主体的に考え、自らの力で活動をより楽しく、関心のあるものにできるよう見守って行ってほしいです。

(8)事例8 「かげはおもしろい！きれい！」(5歳児12～1月)

—子どもの興味・関心をつなげ、深めることの大切さ—

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

友達がしていた影絵を劇遊びに取り入れ、影の面白さに興味・関心を持ち、よりよい影の映り方を工夫しながら活動を楽しみました。さらに、色のついた影に出合うことで、遊びを広げていきました。



○遊びの様子

生活発表会で、大好きな「オズの魔法使い」のお話を劇と影絵の二部構成にして発表することになった。影絵を取り入れたきっかけは、A児が自由遊びの時に、フィルムに描いた絵などをOHPで投影して物語をつかって遊んでいたことである。OHPは保育室に備え付け、遊ぶ際に自由に使えるようにしていた。

まず、幼児たちと担任とで白布を支柱に掛けてスクリーンを作った。幼児の後ろから懐中電灯の光を当てると、スクリーンにくっきりと影が映し出された。幼児は交代で様々なポーズをとったり、友達と一緒に動いたりしながら、映し出される影の形や大きさを繰り返し楽しんだ。

劇遊びが進むにつれて、課題が出てきた。スクリーンに近付きすぎると影が小さくなり、遠くで演技すると大きくなりすぎてしまう。大人数で演技すると影が重なり、何をしているのか分からなくなる。担任は「影が小さいと見えにくいね」「影がたくさんあると分かりにくいね」と幼児の気付きを整理して分かりやすく伝えた。幼児は話し合っ、出てくる人数を少なくすることにしたり、立ち位置の場所に印をつけたりした。こうして楽しみながら工夫した「オズの魔法使い」を生活発表会で演じることができた。

生活発表会を終えて、クリスマスに向けてカラーセロハンを使ったステンドグラスを製作した。担任は幼児たちの作品を窓際に飾った。ある日、珍しく強い日差しが窓越しに差し込み、ステンドグラスの模様が鮮やかに床に映った。幼児たちは



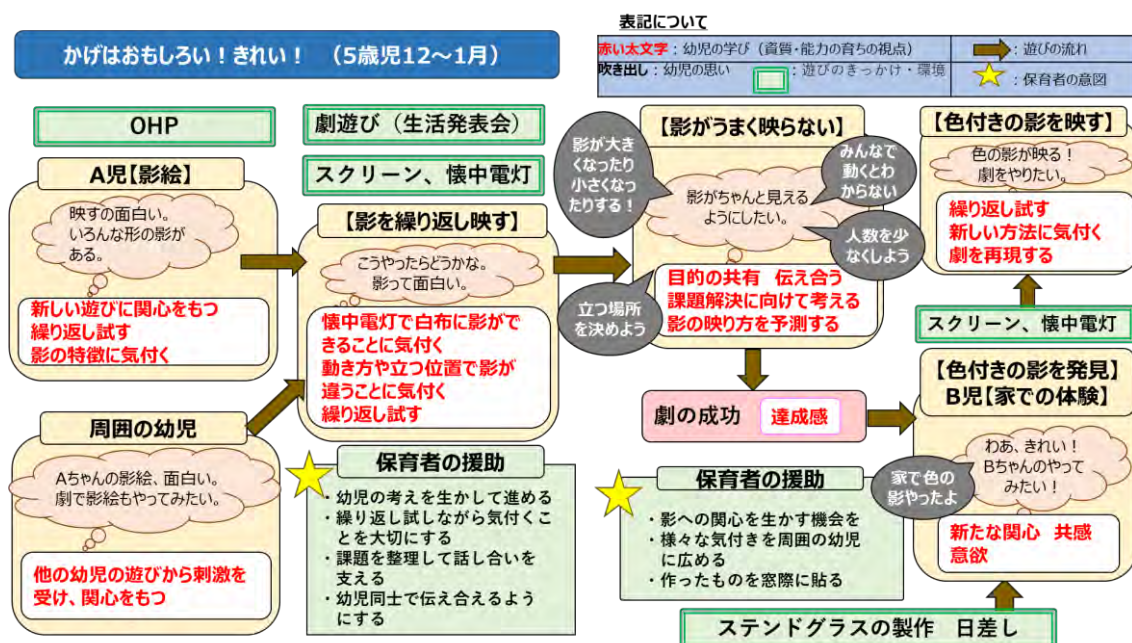
その美しさに驚き、どうして色のついた影ができるのかと話し始めた。すると、B児が「おうちで懐中電灯とカラーセロハンを使って影絵遊びをした」と言う。その話を聞いて、みんなが暗い部屋に行き、製作したスタンドグラスを懐中電灯で照らすと、驚くほどきれいな模様が壁や天井に映し出された。

翌日、担任は発表会時に使ったスクリーンを保育室に持ちこんだ。すると、幼児はカラーセロハンを使って作ったものや最近作って遊んでいたペーパーサートを懐中電灯で照らし、スクリーンに映し始めた。友達の姿を見た幼児たちが次々と「オズの魔法使い」の登場人物を描いては切り、紙棒に貼ってやってきた。そして、人形劇バージョンの「オズの魔法使い」が始まった。さらに、カラーセロハンの色合いを使おうとセリフを変えていく様子も見られた。

その後、幼児は、色水やカラーセロファンと水を入れたペットボトルを懐中電灯で照らしたり、日光に照らしたりして遊びを広げていった。

②環境の構成

- ・保育室に OHP を設置して操作方法を知らせておいた。
- ・白布を支柱に掛けたスクリーンを幼児と一緒に作り、懐中電灯を用意した。
- ・遊ぶ時間をたつぷりと設け、映し出される影の形や大きさなどを楽しめるようにした。
- ・幼児の作ったスタンドグラスを、光の差し込む場所に飾っておいた。
- ・B児の家庭での体験をその場で再現できるよう、物や場、時間を確保した。
- ・幼児の始めた活動を受け止め、翌日に劇遊びで使ったスクリーンを設置しておいた。
- ・カラーセロハン、ペットボトルやカップなどを用意して試す時間を確保した。



③保育者の意図と若手保育者の気づき

○保育者の意図

- ・光を受けてできる影の不思議さや面白さに気付くことを願い、保育室に OHP を置いていた。操作方法を知らせておき、幼児が自発的に用いて気付くことを大切にしたい。

- ・劇遊びのプロセスでは、表現の方法や内容、必要なものなど幼児たちの考えを生かしながら一緒に進めた。繰り返し遊ぶ時間を確保し、光と影の特性や影を使った表現の面白さに気付きそれを生かしていくことを大切にした。
- ・色のついた影に気付いた後は、積極的に先行体験が生かせるようにスクリーンや懐中電灯をいつでも使えるように用意した。

○若手保育者の気付き

- ・私も目の前の遊びの発展を考えて、様々な物を用意するなど環境を整えていたが、体験をつなげていくことには気づかなかった。幼児の体験が時間や形を変えてつながり、繰り返し遊ぶ中で、興味や関心が広がり深まるのだと思った。
- ・影絵を体験した後にカラーセロハンを使ったステンドグラスづくりを行ったのは、季節や発達に応じた製作活動ということだけではなく、それまでの幼児と影との関わりを踏まえてさらなる気付きや展開を願って計画されていたのだと驚いた。また、家庭でやったという幼児の話のすぐに取り入れることで、幼児の関心や体験がさらに広がったと思った。家庭と園の生活がつながっているとは、こうしたこともあるのだと分かった。

④ワンポイントレッスン

Q：幼児たちの興味・関心を生かしつなげていくためには、どうしたらよいですか。

A：幼児たちの先行体験や家庭での体験を生かす機会をつくるのが大切です。幼児一人一人の興味・関心やそこでの気付きを把握し、それをいつ引き出し、生かすことができるか、保育者自身が常にアンテナを張り、積極的に生かしていく心構えが重要です。また、素材や用具、その活動のもつ特性を保育者が十分に理解しておくことで、別の場面で幼児が活用できるよう提案したりつなげたりすることができます。

⑤小学校教員の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ

- ・子どもが自ら考え自ら課題解決に向かうというスタンスは、幼稚園も小学校も同じだと思いました。
- ・遊びの中で幼児が先行体験を活用するのは、小学校における既習事項を活用することと同じだと思います。
- ・具体的な体験を通してその幼児なりに工夫しやり遂げるといった幼児教育での学び方を、小学校でも生かしていきたいです。

(9)事例9 「恐竜出現！！～恐竜の種から透明恐竜へ～」(5歳児 1月)

ー保育士や友達と心を通わせる体験を楽しむー

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

恐竜の種を見つけて木の根元に植えたA児。A児と保育者だけの秘密のはずが思わぬ方向へ話が展開。5歳児が考えを出し合いながら園を守る物語へ発展した事例。

《ポスター作り係》



きょうりゅう
ってかける？

ちいさいこにも
わかるように×
かいておこう！

《貼り紙を貼る係》



きょうりゅうは
そとにいるよね。

そとからみえる
ところいっぱい
はっておこう

《4歳児・恐竜に変身！！》



たべちゃう
ぞー！

がおがお
がおがお！！

○遊びの様子

園庭で恐竜の卵を見つけたA児。木の根本にその卵を植えたことを担任にだけにそっと伝えた。その内容は「明日、僕が恐竜になって先生の前に来るよ。そうしたら、先生は恐竜に食べられてね。」というのもだった。

この時この保育者はこの発想はおもしろい、ストーリー化できるといいが、そのつなげ方が難しいと思っていた。

しかし、時は過ぎ、場所は4歳児の保育室。4歳児数名の男児の間では恐竜ごっこが流行していた時期である。この日も恐竜になりきって遊んでいたところ、恐竜ごっこが白熱。それを知った保育者はこっそりA児に4歳児保育室に恐竜が予定より早く出現してしまったことを伝える。A児は一瞬「やべー、まずいことになった。」という表情を見せ、担任に「どうしよう」と相談。そこでA児はクラスのみんなに恐竜の種をまいたことを伝えると、早速、対策会議へと発展。「恐竜と戦う」「えー、怖いよ」「恐竜は4歳にいるけど他の所にもできるかもしれないよ」「みんなに知らせなくっちゃ！」などの意見が出る。その中でとにかく園のみんなに知らせようということになり、「恐竜注意」の貼り紙作りが始まる。貼り紙を作成する係、出来上がった貼り紙を園のあちらこちらに貼りに行く係に分かれ遊びが盛り上がっていった。

②環境の構成

- ・A児の恐竜出現に困った様子を読み取り、その困り感を子ども達の力で解決できないかと保育者は考えた。保育者はA児を含めた子ども達が解決するための意見を出し合える雰囲気を作る。作戦の1つである貼り紙作りに必要なものを保育者は用意した。

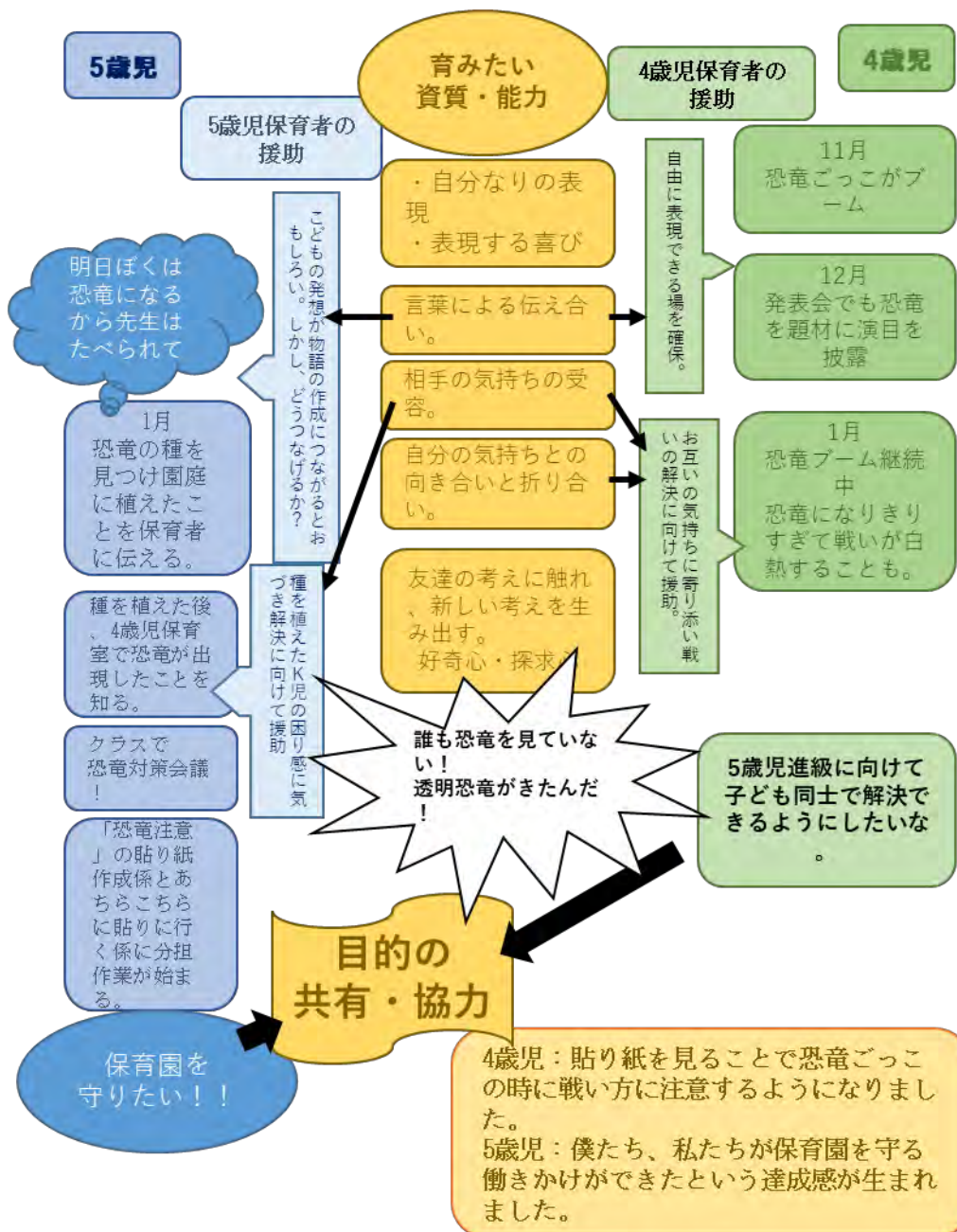
③保育者の意図と若手保育者の気付き

○保育者の意図

- ・子どもの発想（恐竜の種）をおもしろいと思いつつもどのようにストーリー化していったらよいか思案中だった。しかし、事は思いもよらない方向（4歳児で恐竜出現！）に転換する。その思いもよらない出来事をA児のストーリーに肉付けできないかと考えた。

○若手保育者の気付き

- ・自分だったら自分のクラスの中だけで留めてしまいそうなエピソード（事例）だったが、他のクラスにも目を向けて保育されている。こどもの発言に耳を傾け、それで終わりにせず「どうしたらこの発言を次にいかしていけるか」という考えに至ったことがすごいなと思った。自分の保育にも取り入れていきたい。
- ・他のこども達を巻き込んで、目に見える形で「これ、なんだ？」と他のこども達が気づいて遊べる保育を展開していたことが素晴らしいなと思った。



④ワンポイントレッスン

Q：この事例で子どもがなにげなく言った言葉が年齢を越えた保育活動に発展したのはなぜでしょうか？

A：・発言を流さずに拾い上げ、こどもと同じ目線に立って、こどもと一緒に楽しもうとしているから。個別対応から集団で遊べるよう、遊びを展開していける視点を持っているから。

- ・こども達がどうやって恐竜のことをみんなに知らせることができるか、発言できる場の雰囲気作りをし、最終的にこども達が主体的に考え、視覚に訴えることができるものの設置をしたことが、年齢を越えた保育活動に発展したのではないだろうか。

⑤小学校教員の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ

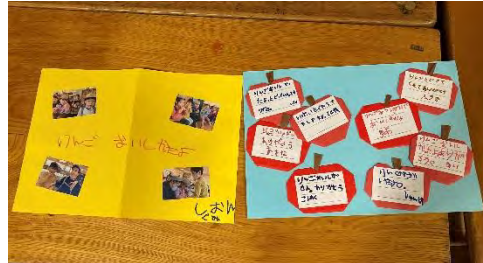
- ・こども達がなにげなく発した言葉から思いもよらない保育へ展開することがあります。こども達の純粋な言葉も保育者の働きかけ一つでこどもは偉大な力を発揮します。こども達の発想や発見、探求する力をぜひ、学びにつなげていただきたいと思います。

(10)事例10 『ありがとう』の気持ちを伝えたい(5歳児 1月)

—ごっこ遊びだけでなく、お手紙を実際に出すことで、日々の幼児の関心を成長につなげる—

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

幼児の思いを見守りながら、みんなで思いを実現していく。



○遊びの様子

りんご農家をしていたA児の祖父からもらったりんごをクラスみんなで食べた。「おいしいね」「Aくんのおじいちゃんりんごだって」という言葉にA児はとても嬉しそうにしていた。

数日後、「おじいちゃんにありがとうってお手紙書きたいな。この前も書いたよね。(4歳児の時も園でお礼の手紙を書いた)」とA児が思い出したかのように言うと、周囲の子ども達も「ありがとうってしたいね～」と盛り上がっていた。

でも、A児の祖父が住んでいるのは他県のため、「遠いよね～」と数人で話しているとB児が「年賀状にみたいに届けたらいいんじゃない」と言った。「いいかも～」「でも住んでいるところはどこだろう？」とC児。「数字も必要だよな?」「切手も貼らないと?」とこれまでの保育の中で敬老のお手紙を書いたり、家族へ年賀状を書いたりしてきた経験を生かして、どんどん話が進んでいった。

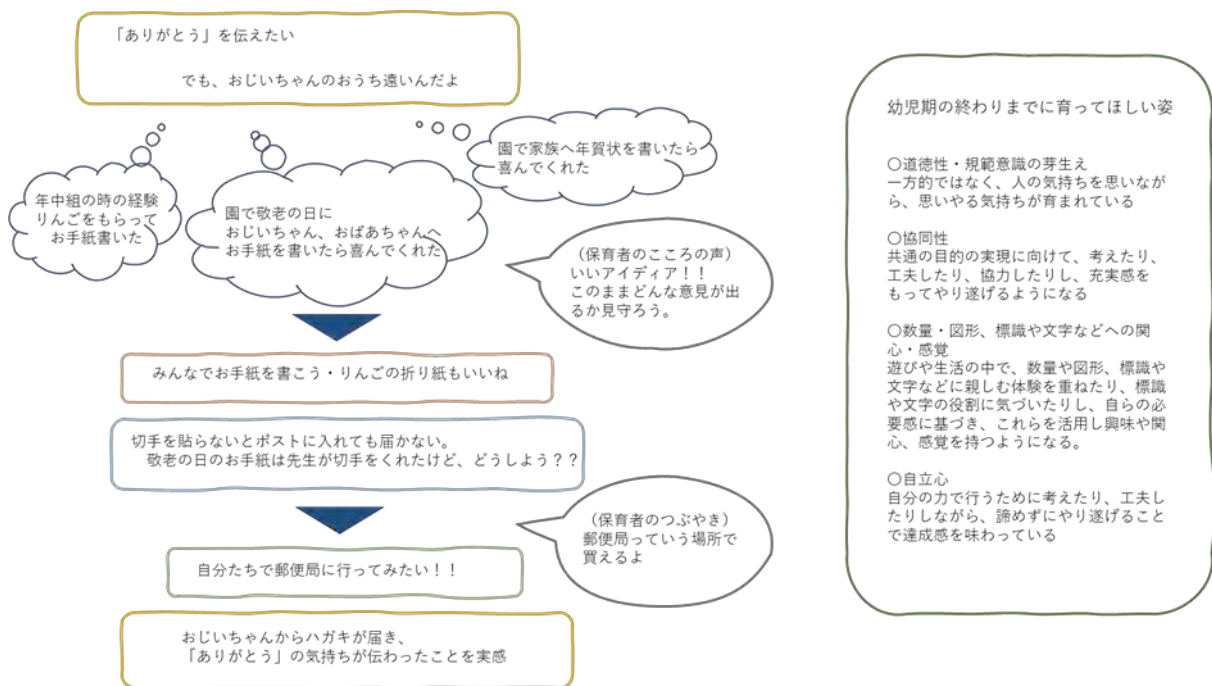
「私、りんごの折り紙折れるよ。」とB児。「そこに、お手紙つけようよ」とA児。すぐにお手紙は書きあがり、A児におじいちゃんの住所を覚えてもらい、封筒に封をしたが、切手がどこで売っているかわからない。そこで、保育者に聞いてみると郵便局で売っていることが分かった。徒歩20分のところにある郵便局へ歩いて行くことにした。郵便局では郵便物

の重さを量ること、重さによって金額が違うことを教えてもらい、自分たちで切手を購入し、貼り、無事ポスト投函ができた。

後日、おじいちゃんからお返事が届き、気持ちが伝わったこと、お手紙を喜んでもらったことにとっても嬉しそうだった。

②環境の構成

- ・日々の生活の中で感謝の気持ちを伝え合うあたたかなかわりを心がける。
- ・ごっこ遊びだけでなく、火おこしや料理、切手を使ったお手紙や年賀状づくりなど本物に触れる体験を積んでいる。
- ・保育者は子どもの声に耳を傾け、見守り、困ったときだけヒントを出すようにしている。



③保育者の意図と若手保育者の気付き

○保育者の意図

- ・毎日の生活の中で、自分の気持ちと向き合い、友達と思いを伝え合う経験を丁寧に重ねていくことで、感謝の気持ちも芽生えていくんだな。
- ・伝える方法はどんな方法が出てくるのか、保育者は口を出さずにがまん。がまん。
- ・「どんな」がたくさん出てくるといいな。
- ・地域とのかかわりを普段から模索することで、地域資源を生かすことができ、子どもにとっても「知っている場所」が増え、自分の暮らす地域でより安心して生活が送れるようになるかな。

○若手保育者の気付き

- ・育ちのチャンスが日々の保育でたくさんあり、そのチャンスを見逃していることがあるなと感じた。
- ・子ども達あつての保育者だな。

- ・お友達と思いを伝え合う経験を丁寧に行うと協同性が育つんだなと思った。

④ワンポイントレッスン

Q：幼児の興味や関心をどのように活動につなげたらいいの。

A：普段から子どもとの会話を大切にし、今までどんな経験をしてきたのかな、家庭ではどんな遊びをしているのかな、どんな思いを持っているのかなとその子の育ちに多角的に思いを巡らせることで、育ってほしい姿やそのための活動への援助が見えてくるのだと思います。

⑤小学校教員の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ

- ・安心できる身近な大人の存在が手本となり、子ども達同士も次第に安心して関わるようになっていくのだと思います。また、意見や話を聞いてもらえる喜びを感じることで友達の意見に耳を傾けたり、相手の思いに寄り添えるようになると思います。さらには、聞いてもらえる、受け止めてもらえる安心感から自己を存分に発揮できるようになっていくのだと思います。

第3章 まとめ

当調査研究を通じて、各園より、幼児が日頃の遊びや園での生活を通じ、新たな挑戦に取り組む事例を収集することができた。

幼児は、自ら周囲に働き掛けてその幼児なりに試行錯誤を繰り返し、自ら発達に必要なものを獲得しようとするようになることである。このような幼児の姿は、いろいろな活動を保育者が計画したとおりに全てを行わせることにより育てられるものではない。幼児が自ら周囲の環境に働き掛けて様々な活動を生み出し、それが幼児の意識や必要感、あるいは興味などによって連続性を保ちながら展開されることを通して育てられていくものである。保育者の一方的な保育の展開ではなく、一人一人の幼児が保育者の援助の下で主体性を発揮して活動を展開していくことができるような幼児の立場に立った保育の展開である。活動の主体は幼児であり、保育者は活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもって環境を構成していくのである。

つまり、幼児の主体性と保育者の意図が組み合わさっていくことが重要であり、保育者の思いで一方的にやらせてはいけなし、幼児の主体性に任せきりでは発達に必要な体験はできない。幼児の主体性と保育者の意図との絶妙なバランスの上に保育は展開されているが、経験の浅い保育者がすぐにこうした保育を展開することは難しいことから、本研究では、保育を「見える化」できるように、経験の豊富な保育者が日々の保育の中でなげなくやっていることを言語化することを意識した。

本年度は、事例の収集等を中心に行ったが、経験の浅い保育者に対して伝えたいことは何かを整理し、伝えたいことに応じた事例収集が望まれる。さらに、事例を収集するのみならず、例えばいくつかの事例活用の具体例を示すなど、現場で事例を活用しやすいような工夫も必要である。

保育の質を高めていくためには、本研究を更に深めていく必要があるが、本事例集が、日頃は伝えきれない保育者の意図が明確になることで、「若手教職員が参考にできる資料」として、若手保育者の新たな気付きにつながることを願う。

第4章 参考資料

参考資料として、以下を掲載する。

- ①事例記載フォーム
- ②事例集の活用方法
- ③資質・能力の三つの柱に沿った、幼児教育において育成すべき資質・能力の整理イメージ

①事例記載フォーム

■事例記載フォーム■

【事例収集の視点】

①幼児の活動に見られる遊びのプロセス

事例収集の視点①幼児の活動に見られる遊びのプロセスに関する取組について、以下ご記入ください。

指定する文量に収まらない場合はそれを超えて記入していただいても結構です。

1. 取組事例の名称をご記入ください。

●事例名 ()

●対象児の学年と時期 () 歳児 () 月

※この事例で若手保育者に一番伝えたいことをサブタイトルに記載してください。

2. 事例の概要をご記入ください。

2～3行程度

3. 具体的な遊びの様子をご記入ください。

※遊びの様子がわかる写真を添付し、その写真についてご説明をお願いいたします。

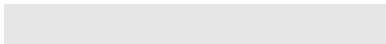
※写真のデータを別途ご提出お願いいたします。

写真

※幼児名は「A児」「B児」とご記入ください。

※誰の動き・言葉なのか関係性がわかるようにご記入ください。

<遊びの様子>は、A4版で2/3程度に事例を記載してください。



4. 環境の構成をご記入ください。

※人やものとの関わりについて記載ください。

(記入例)

- ・ 遊びに必要な遊具は、幼児が〇〇して、・・・なように、～～している。
- ・ 保育者は、〇〇〇〇して、～～している。

<環境の構成>は、保育者が願いを込めて準備したこと、事例の中で幼児たちの反応が面白かった素材・遊具などの環境や、保育者の援助等、提出する事例が好事例と考えた理由につながるものが読み取る材料となるよう記載する。

その中に、保育者が、なぜ、〇〇〇の援助をしたのか、その背景(保育者の思いや願い等に関すること)が記載されていると、読み手が分かりやすいと思います。

最終的な紙面は、3～4行程度を想定していますが、全体的な調整・編集をする際に要点が分かるように書いていただきたいので、6～7行になっても構いません。

5. 保育者の意図と若手保育者の気づきをご記入ください。

(1) 保育者の意図

保育者が願いを込めて準備したこと、事例の中で幼児たちの反応が面白かった素材・遊具などの環境や、保育者の援助等、事例から読み取れる、幼児教育らしい特徴について、素人にも分かるように丁寧に記載する。

※保育者が、なぜ、〇〇〇の援助をしたのか、その背景(保育者の思いや願い等に関すること)が記載されていると、読み手が分かりやすいと思います。

最終的な紙面は、4～5行程度を想定していますが、全体的な調整・編集をする際に要点が分かるように書いていただきたいので、6～7行になっても構いません。

(2) 若手保育者の気づき

※この欄は、保育者自身に自分の日々の保育に参考にできそう・取り入れてみたいと思うきっかけになることを目指しています。若手保育者が事例を読んで気付いたことや自分の保育を振り返ってハッとしたことなどを、率直な表現で書いてください。

特に、別紙の記載例のような自分の保育を振り返ってハッとしたことなどが入ると分かりやすいと思いますので、ご記入の際の参考にしてください。

※この＜保育者の意図と若手保育者の気づき＞の項は、最終的な紙面は、最大10行を想定しています。

6. 前頁の写真と【遊びの様子】から読み取れる幼児の内面の変化を、関係性が分かるように流れ図にご記載ください。

※PowerPoint 等で作成し、データをご提出お願いいたします。

※前項の＜保育者の意図と若手保育者の気づき＞の記載内容と関連付けて作成すると、焦点化して描きやすいと思います。

※流れ図の作成が難しい場合は、いただいた情報をもとに弊社で作成いたします。

遊びの中の学びの流れ図

- 保育者の動きも関連することが多いので、事例に応じてご記入ください。
- 幼児の内面の変化を資質・能力と関連付けて考え（分析）、色文字で目立つように表記してください。
- 分析の視点は、資質・能力の解説図の三つの楕円の中に例示されている言葉を参考にして考え、ご記載ください。

7. <ワンポイントレッスン>

前頁の保育者の意図と若手保育者の気付きを受けて、若手保育者が次のステップに進むために気付いてほしいことをご記載ください。

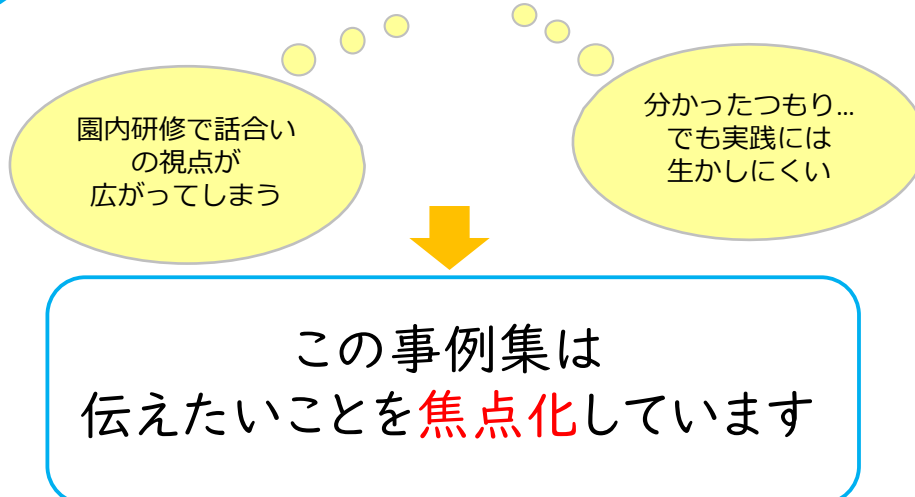
※若手保育者が、自分の保育を振り返ることができるように、Q&Aの形で完結に視点を示して記載してください。

8. <小学校教員の感想または小学校教員に伝えたいメッセージ>

小学校教員に伝えたいことがあれば、ご記載ください。

事例集を活用してみましょう

? 園内研修でのこんな悩み、ありませんか



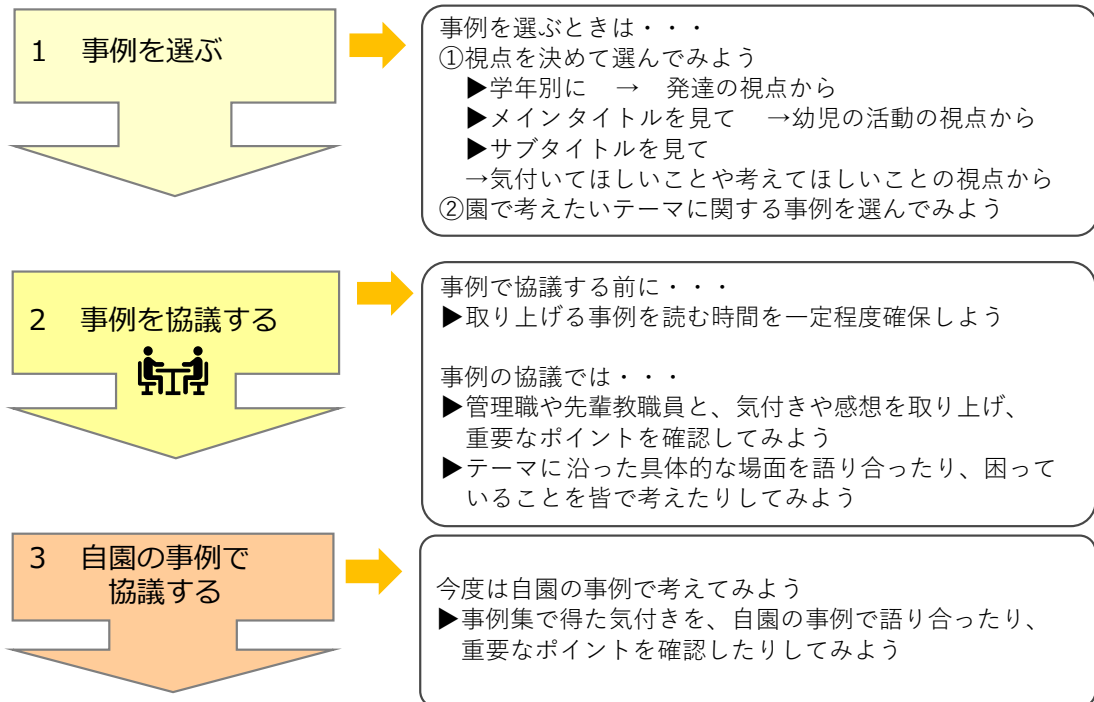
1

? この事例集の特徴は?

- ▶ 事例のメインタイトルは幼児の活動の視点から、サブタイトルは気付いてほしいことや考えてほしいことの視点から記述
伝えたいことを焦点化!
- ▶ 遊びがイメージしやすいように、2ページで端的に記述
園内研修の導入として活用できる!
- ▶ 事例の解説はサブタイトルに焦点を当て、そこから「教職員の意図」や「若手保育者の気付き」へ
保育者の意図や、環境の構成の意図が見える!

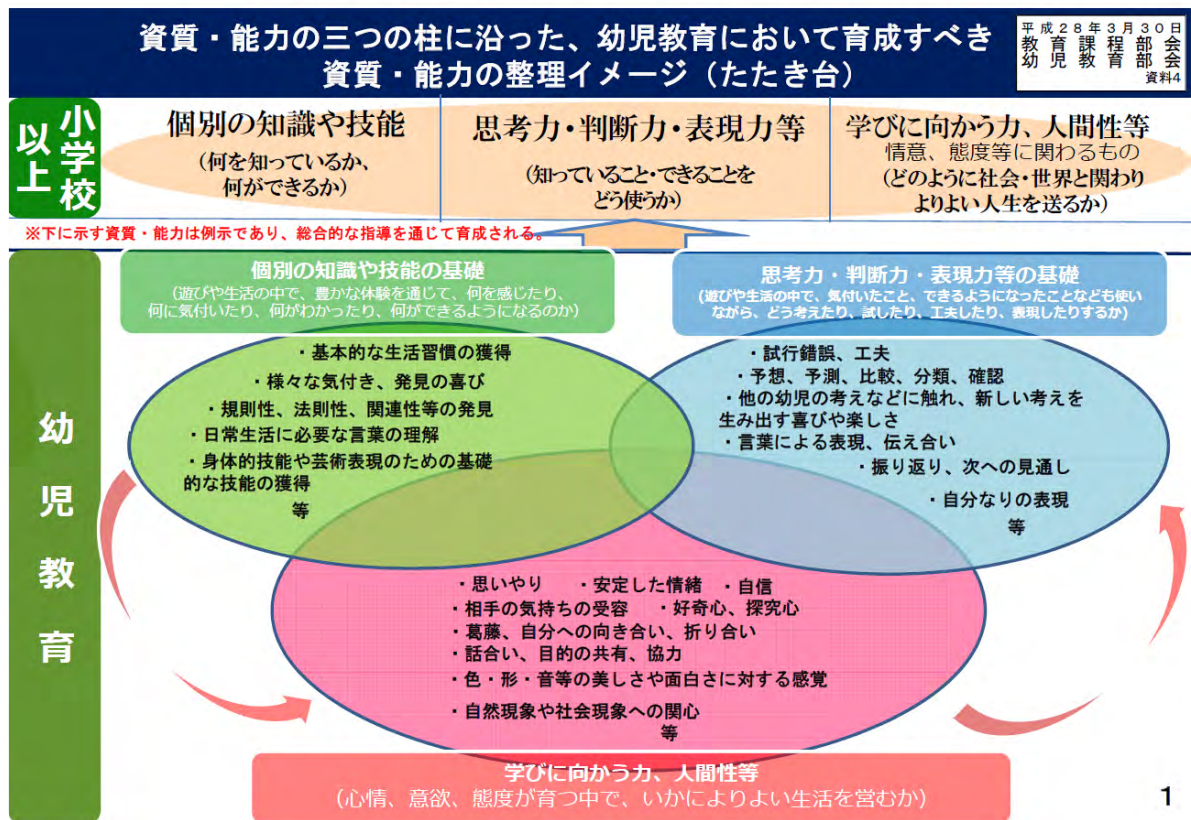
2

？ 実際にどのように活用するの？



③資質・能力の三つの柱に沿った、幼児教育において育成すべき資質・能力の整理イメージ

当調査では、以下の幼児教育において育成すべき資質・能力の整理イメージに沿って、事例収集フォームを作成し、事例集を記載している。



https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/04/19/1369745_03.pdf